ISSN 0287-2102

東海地区
大学図書館協議会誌

55

2010

東海地区大学図書館協議会

東海地区大学図書館協議会誌　第55号　2010

目　　次

巻　頭　言　大学図書館の進化
名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長　岸　恭一　1

講演要旨　平成21年度第1回研修会「図書館職員基礎研修（第2回）」
大学図書館職員に求められているもの ― 成長する有機体の基軸として ―
前お茶の水女子大学参与　雨森　弘行　2
大学図書館と広報 ― デザイン・レイアウト ―
名古屋造形大学教授　渡邊　敏之　13

平成21年度第2回研修会「保存修復講演会・講習会」
紙資料の保存修復
財団法人元興寺文化財研究所　金山　正子　19

事例報告　第64回（2010年度）研究集会「図書館を演出する」
がまじゃんぱー と ちゅーりっぷさん の観察日記
― 筑波大学附属図書館でのキャラクター活用事例 ―
筑波大学附属図書館情報管理課　嶋田　晋　25
利用者と共に造る
― 図書館応援企画展『展 FINAL in 図書館』の実践 ―
大阪芸術大学図書館　多賀谷　津也子　33

行　事　第64回（2010年度）総会・研究集会　45
新図書館紹介　静岡大学附属図書館（静岡館）　52
中京大学名古屋図書館付属新棟　53
会則等　54
総会当番館一覧　57
加盟館一覧　58
役員館一覧　62
研修会一覧　63
広告主一覧

巻頭言

大学図書館の進化

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長
岸　　恭一

今年は「種の起源」を著したダーウィン生誕201周年に当たる。種の多様性を進化の観点から論じたダーウィンの指摘通り、地球環境の変化が3,000万種とも言われる多様な生物種を生み出してきた。その重要性を議論する生物多様性国際会議も第10回を数えるまでに至り、今回当地名古屋で開催されたことは喜ばしい限りである。大学図書館を取り巻く環境も大きく変化しているが、将来、各大学図書館が色とりどりの花を咲かせるか、衰退の道を歩むかは、それぞれの図書館の適応次第である。ここで、大学図書館の将来を生物進化論の立場から顧みるのも一興であると思われる。

15世紀にグーテンベルクにより発明された活版印刷は、冊子体の書籍を爆発的に普及させた。ITの進歩による情報のデジタル化は、電子ブック、電子ジャーナル、データベースなどをもたらし、今や冊子体書籍を駆逐せんとする勢いである。電子媒体の普及で、時間的、空間的な制約が取り払われ、夜中でも、図書館や本屋に出かけることもなく、インターネットを利用して必要な情報を入手することが可能になった。電子媒体は保管が容易で、スペースをとらず、アクセスが速く、検索も簡単である。しかし、アクセスが容易になり、便利になったからといって、学生の本離れに歯止めがかかり、図書館利用が高まることを意味しない。

世の中がどう変わろうと、学術資料の収集、保存、提供という図書館本来の機能は変わらない。引き続き、蔵書やマルチメディアの充実に努めなければならない。しかし、図書館の建物が重厚で、いかめしく、館内がほの暗く、堅苦しい雰囲気のする、古色蒼然たる本の倉庫では、利用者から見放されるであろう。世の動きに応じて大学図書館も進化しないと、知の殿堂も危うい。生物は、突然変異により環境に適応し、自然選択を受けて適者生存の原理に従って生き残ってきた。図書館も改革により適応できなければ消えて行くしかない。

図書館の生き残りをかけ、様々な取り組みが行われている。より積極的に大学の教育と研究に寄与するためにリファレンス機能を強化し、情報リテラシー教育に力を入れるようになった。紙媒体のみならずマルチメディアの充実にも努めている。気軽に利用できるように入り口を明るくし、館内にはおしゃれな装飾をこらし、本やマルチメディアと人の交流だけではなく、人と人の交流を深めるためにカフェを併設している図書館も見受けられる。場としての図書館を活用するために、総合的学習スペースとしてのラーニングコモンズを設ける大学も増えつつある。従来型の紙媒体を主体とした図書館機能と、電子ジャーナルや電子書籍を取り入れた電子図書館機能を融合させたハイブリッドライブラリーを構築するのも一つの重要な方向である。一大学ですべての分野を網羅することはできないので、施設の相互利用や教育研究資源の共同利用を促進し、コンソーシアムを形成して大学間の連携を強化する必要性は高い。

生物界では、生存闘争に勝つために、恐竜のように体を大きくする戦略をとったものもあれば、体が小さくて弱い生物は数で勝負し、またヒトは頭脳を発達させ、知恵で生物の頂点に立った。大学図書館も個性化と多様性を目指して然るべきである。生物の進化には、予め組み込まれたプログラムがなく、行き当たりばったりに対応してきた。これに対して図書館の進化は、将来を見通した計画的なものでなければならない。個々の大学は、その特色、得意分野を生かして、大学教育と研究をリードする図書館活動を模索し続けなければならず、その適否は自然選択により評価されるであろう。

講 演 要 旨　平成 21 年度東海地区大学図書館協議会「図書館職員基礎研修」(2009.12.3)

大学図書館職員に求められているもの
―成長する有機体の基軸として―

前お茶の水女子大学参与
雨　森　弘　行

〔レジュメ〕

はじめに

文部科学大臣の諮問機関である第５期科学技術・学術審議会は、今年２月に学術分科会研究環境基盤部会の下に、再び学術情報基盤作業部会を設けて審議を重ねていたが、その結果が７月に「大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について」（審議のまとめ）として公表された。その副題として「電子ジャーナルの効率的な整備及び学術情報発信・流通の推進」が掲げられており、電子ジャーナル、オープンアクセス、機関リポジトリ等の課題が取り上げられている。また、同作業部会は既に平成 18 年３月に「学術情報基盤の今後の在り方について」という報告を出しており、その中でも、今後大学図書館が緊急に果たすべき役割について、図書館サービスの在り方や、地域との一層の連携など具体的な提言がなされている。

従って、各大学図書館においては、これらの審議の方向を見据えて、それぞれの大学の置かれた環境と条件の中で、ここに指摘されている課題解決に向けて速やかに行動を起こしていくことが求められているといえよう。

そうした状況の中で、図書館の現場で働く職員は、どのような心構えで個々の業務に取り組んでいけばいいのか。目の前のルーティンワークをこなしながらも、課題解決を目指して現在及び将来に向けて、どのように業務の改革・改善を進めていけばいいのかが問われているといえる。とりわけ、新任職員の皆さんにとっては、あまりにも難問山積で、一体どのような考えを持って、何を指針とし、どのような方法で実行していけばいいのか困惑しておられる方もいるかも知れない。しかし、図書館のおかれた環境や取り巻く状況がどのようなものであれ、大切なことは、常に図書館職員の基本に立ち返って考え、行動することである。

そこで、本日は、かつて私自身が大学図書館の現場や図書館・学術情報行政、あるいは大学経営の現場で直接・間接に関わった事例を参照しながら、いま図書館職員に求められている個人としての課題と、組織としての課題について皆さんとともに考えたみたい。それらの中から皆さんが何らかのヒントを得ていただければ幸いである。

〔講演〕

私の今日の話の流れは、レジュメに書いてあるように、二つのことについて話したいと思います。一つは、職員個々人の人間力を高めるということと、もう一つは、組織の総力を結集するということです。煎じ詰めれば、大学図書館に求められているものは、この二点に集約することができるのではないかと思っております。

１．個人の人間力を高める。

①まず、図書館職員としての人間力を高めるためには、常に原点に立ち返って物事を考えるということが肝心であると思います。ここで原点というのは、図書館の目的・使命は何かということです。例えば、前慶応義塾大学教授の高山先生は、図書館の目的・使命を定義しておりますが、この中で特に重要なのは、「情報資源へのアクセスとその利用をすべての人に保証し、…」という点です。利用をすべての人に保証するというのは、言葉は簡単ですが、それを実際に実現するということは、決して容易なことではない。それだけに相当な覚悟を持って、その実現に取組まなければな

らないということをしっかりと認識しておかなればなりません。それから次は、皆さんよくご存知だと思いますが、かの有名なインドの図書館学者であるランガナータンの「図書館学の五法則」です。時代がどのように変わろうとも、これは図書館に関わる者にとっては、いわばバイブルのようなものであって、永遠に輝きを失うことのない法則であると思っております。

次は、アーカートさん、この方は、あの英国の国立図書館の大改革でドキュメント・サプライセンターを創設された中心人物でありますが、彼の著書である「図書館業務の基本原則」の中で、18 項目に亘って原則を述べております。その中の第１項目では、やはり「図書館は利用者のためのものである。」として「利用」ということを第１に掲げております。このように、図書館にとって「利用」という概念は、その最も重要な原点であるといえます。それから、第２項目、第３項目も本質を鋭く突いた指摘であると思いますが、特に、第 12 項目の「どんな図書館も孤立してはやってゆけない。」という原則は、私自身、これまで幾つかの図書館ネットワークの構築に実際関わってきた経験者の一人として、身に染みて痛感しているものであります。このような図書館の原点を忘れることなく、常にそこへ立ち返って、そこから現実を見直していくという心掛けが大切であります。

②次に、「セルフマネジメント」ということですが、それはここに示しているとおり、職員にとっては、職位の如何を問わず目標の設定とその管理は必須要件です。そして、目標管理の最大の利点は、自らの仕事ぶりをマネジメントできるようになることです。そのためには、自分の目標を知っているだけでは十分でなく、目標に照らして自らの仕事振りと成果を評価できなければならないし、また、自己管理による目標管理は、スローガン、手法、方針に終わってはならない、とドラッカーは彼の著書『マネジメント』の中で述べています。

ここで、私のかつて勤務した大学で行った目標管理の実例をご紹介します。この書式は私と人事課長とで作成したものですが、公務に関する目標設定のほかに、個人的な計画（例えば、自学自習や趣味の事柄も含めて）も記入できるようにしてあります。勿論、その欄の記入内容や方法は自由ですが、自分から積極的に自己 PR をしたいと思っている職員にとっては願ってもない機会を与えられたと好意的に解釈されて記入する職員が多く、本人が公務以外の面でどれだけ意欲的に行動（自己啓発等）しているか、また、本人には現行の職務のほかに、どんな隠れたる才能や能力が備わっているかが分り、人事管理上もたいへん役立つものになりました。

③さて、次に「人間力」の基になる心的な要素について考えてみましょう。昔から人間の精神（心）を構成しているのは「知、情、意」の三つの要素であるといわれております。ある物事や状況を分析したり、新しいことを企画・立案しようとする場合には、知識や知能と思考力や意志力が働かないと出来ないし、また、考えたことを実行しようとして、ステークホルダーと交渉したり、自ら行動する場合には、意志力や思考力とともに、その行動に情熱（やる気）が伴わなければ、相手を説得したり、周りの人々の理解を得ることができません。ただがむしゃらに行動すればよいというものではなく、この知・情・意がバランスよく働くように、日頃からそれぞれを鍛えておかなければなりません。

ところで、それをどのようなプロセスで行うのがよいかというのは、人それぞれ置かれている環境や条件が違いますから、一概にいうことはできませんが、少なくとも若いうちは、まず行動力を付けることを優先することが必要だと思います。図書館職員の中には、時々、とても知識が豊富で、よく発言もする人物でありながら、自ら行動を起こしたり、他人と協働したりすることはしない人がおります。そのような、いわゆる頭でっかちな評論家のような人材は、何人居ても具体の改革・改善は一向に進みません。知識や智恵は年齢や経験とともにある程度、積み重ねていくことが

できますが、情熱を伴う行動力は若いうちから意識的に鍛錬していかなければ身に付きません。

それと同時に、広い視野を持つ－大局観を養うということも大事なことで、これも若いうちから心掛けておかなければ、俄かに身に付けられるものではないということです。ここにJR東海の会長をしておられる葛西敬之さんという有名な経営者の方の言葉がありますので、それをご紹介いたしたいと思います。彼はリーダーシップについて、こう述べております。「リーダーは、人から与えられた課題にチャレンジする人間ではなく、自分で目標をつくる人間である。そうした心構えはなるべく若いうちから意識して持っておいた方がいい。自分の経験を踏まえて、若い社員にアドバイスするのは、『自分が今いるポジションより、二階級上の立場に自分がいるつもりになって、自分がやっている仕事を俯瞰してみろ』ということだ。」これは、組織の中で働く者にとっては、実に本質を突いた処世訓ではないかと思っております。私もかつて職場の先輩からよく聴かされた教訓ですが、その時、とても強く印象に残った言葉でした。

図書館のように、一般的にそれほど組織が大きくない職場では、二階級上といえば、図書館長に該当する場合もあるわけですが、そんな場合には、皆さんのような新入職員であっても、常に館長になったつもりで、自分のやっている仕事を眺めてみるということを意味しているわけです。しかし、そんなことできるわけがない、と諦めるのではなくて、自分のやっていることを、できるだけより客観的に、大所高所から見つめ直そうという意識を持とうと努力することが大切なのではないかと思います。

また、何か改革を進めようとするときに、必ずといっていいほど出くわすのが、行く手を阻む壁が現れるということです。それはよく言われるように「物理的な壁」、「制度の壁」、「意識の壁（心の壁）」の三つの壁です。とりわけ「意識の壁」はなかなか手強くて、それらの壁を乗り越えるのは簡単にはいかないわけですが、これらを乗り越えるのは、強い使命感と情熱と意志力でもってそれを成し遂げることが必要です。

さて、以上の事柄を念頭においていただきながら、次に実際に私自身が体験した事例をご紹介していきたいと思います。

2．参照事例

①　国立大学の図書館におけるレファレンスサービス体制の基盤整備について

1970年代の国立大学では、国の方針に基づく、国家公務員の定員削減の施策の下で、毎年のように職員定員の削減が行われておりました。図書館も例外ではなく、全学の職員と同様、一定の比率で確実に定員削減が割り当てられていて、定年退職者が出た後は、その欠員を補充できなくなり、従って、その分の図書館業務を支える職員数は確実に減少の一途を辿るしかないという状態が続いておりました。

そんな状況の中で、文部省の大学学術局では、全国の大学における研究教育支援職員たる事務職員がジリ貧になっていくことを憂慮して、これに何とか歯止めを掛けなければならないと考えて、当時唯一、定員増の要求が認められていた「新たな行政需要が生まれた」分野については、定員増要求を積極的に行っていこうという機運が局内に盛り上がってきていたんですね。その時、私は情報図書館課の大学図書館係に配属されておりましたので、当時の上司の上島係長に、大学図書館のレファレンス・サービス担当要員の要求をしてはどうかと提案しました。それは直ちに古市課長に伝えられて、課として要求を出すことになり、その概算要求書を、提案者でもあり、現場の事情を知っているということで私が作成することになりました。そして、全国立大学の附属図書館に対して、「参考業務担当職員」の定員を最低でも１人、大規模大学にはそれ以上複数の定員を配分するという、文部省としては前代未聞の定員増の要求書を作ることになったんですね。もちろん、そんな要求書をつくる様式があるわけではないし、すべて自分の頭で考えるしかなかったわけですね。

そもそも「参考業務」とは一体、どんな仕事をする業務なのかということは、一般の人はほと

んど認識がないわけで、それをどうやって第三者（一般国民）が理解できるように、要求先の総務省・行政管理庁の担当官に説明できるかが勝負でした。その「参考業務」という名称も、はじめは正攻法で「レファレンス」という名称を出したかったんですが、全く意味不明だからそんな名称では駄目だという課内や会計担当部署の意見をも考慮して、参考業務に落ち着いた経緯があり、要求書が出来るまでにも難航しました。

しかし、一番苦労したのは、その要員がなぜ今必要なのか、なぜすべての大学に必要なのか、また、なぜそれは既存の定員の中で遣り繰りできないのか、ということを理路整然と説明できる資料を作成することでした。とにかく、どこの大学にも既に在る恒常的な施設である図書館に対して、総数115人という定員要求を行うことは空前絶後のことでしたので、相手方の行政管理庁の担当官（副管理官）（各省庁の概算要求は、基本的に大蔵省に対して行われるが、定員要求を伴うものは、まず公務員の定員を管理している行政管理庁をクリアーしなければならなかった。その時、実質的な査定権限を持って前面に出てくる担当官）をいかに論駁するかが勝負でした。相手はとにかくこちらの要求の弱点を突いて切り崩すことに専念する百戦錬磨の査定のプロなので、あらゆる角度から容赦なく切り込んできます。ですから、そのヒアリングの際には、こちら側も経験豊富な係長クラスが先頭に立って説明を行うのが普通でしたが、この要求では、特殊な専門分野の事柄でもあるというので、その実態を知っている私が新参の係員ではあっても、説明に立つことになったんですね。何しろ、私としては初めてのことで、その時はものすごく緊張しておりました。しかし、こちらは素人であっても、ある意味で全大学図書館の今後の命運が掛かっている要求なのだから、絶対に後ろに引くことはできない、という覚悟で臨みました。何度切り込まれても、決してひるまずに反論していきました。それはまさに“戦い”であると言ってもいいものでした。

その結果、幸いにも、初年度（昭和47年（1972年）度）８人分の定員を獲得したのを皮切りに、その後10年間に亘って年次計画的に定員が計上され、総計115人分の定員を全大学に配置することができました。これは、第一義的には図書館職員の増員を実現できたことになるわけですが、第二義的には、これによって、参考業務（レファレンス業務）というものが、これからの大学図書館にとって必須の業務であり、従って、そのための要員が必置されなければならないということを、各大学において学内に周知することができたという点で大きな効果があったと言われております。

私はこの経験から、次のことを学びました。およそ改革を行う場合は、その必要性に気付いた者が、自ら行動を起こしていくことが大事であるということ。そして、それの成否を決めるのは、要求の際の理屈もさることながら、どれだけその行動に意志と情熱（熱意）が伴っているかということが決め手になるということでした。

②③　書誌ユーティリティ（NACSIS-CAT/ILL）（（国立）学術情報センター）の構築と大学・学術図書館間ネットワークの形成について

さて、次の事例は皆さんよくご存知の我が国初の書誌ユーティリティであるNACSIS-CAT/ILLの構築についてのお話をいたします。はじめに書誌ユーティリティとは何かということについて簡単に説明いたします。このスライドに示したように、現在、全国の大学や研究機関において、あらゆる学問領域の学術研究活動が日夜行われているわけですが、それらの活動を情報流通の側面からサポートするインフラ（基盤）として、「学術情報システム構想」が文部省において（1980年に）策定されました。その構想を実現するための中枢センターとしての役割を担う施設として「学術情報センター」が創設されますが、そこに付与された幾つかの機能のうち、総合目録を作成・提供する機能とそれを使って、図書館間の資料相互貸借（ILL）を行う仕組み（システム又はそれを運用する機関）を書誌ユーティリティと呼んでおります。（ppt.）

この書誌ユーティリティは、大学図書館の現場

と国の学術情報行政との絶妙なコラボレーションによって誕生したものですが、その経緯を簡単にご紹介しておきたいと思います。まず、この総合目録の一番の基になったのは、文部省が昭和28年（1953年）から刊行を始めた冊子体の「学術雑誌総合目録」（略称「学総目」）です。最初は、国立の七大学（旧帝国大学）の蔵書を対象にして作成されましたが、その後、次第にすべての国公私立大学の図書館や大学以外の研究機関などにも収録対象を拡大し、内容が充実していきました。そうして、収録するタイトル数や所蔵データが膨大になってきて、この事業はとても文部省が人手を使って遂行できるようなものではなくなり、事業の電算化が検討され、文部省が監修を、慶応大学の国際医学情報センター（IMIC）が編集を、そして紀伊国屋書店が出版をそれぞれ担当するという、当時としては珍しい、いわば“官・学・民”の三者提携方式によってこれを刊行するということになったんですね。その結果、10年間改訂されずにいた「自然科学欧文編1975年版」を、わずか1年3か月で編集・出版することができました。このことが大きな転機になって、間もなくこの学総目事業は文部省の手を離れて、新たな展開をしていくことになります。そのきっかけとなったのが、昭和52年度に東大に「情報図書館学研究センター」という学内共同教育研究施設が設置されたことでした。文部省はそこにこの学総目事業を移管して、新たな発展を期すことになりました。そして、最初にそこの教員として採用された根岸先生（現NIIの教授）が中心になって学総目のデータベース化に取り組んで、昭和55年（1980年）に完成することになります。

一方、文部省の学術国際局情報図書館課では、昭和52年（1977年）4月の人事異動により新任された情報図書館課長さんが間もなく体調を崩されて入院加療することになり、暫くの間、大学図書館行政がブランク状態になるんですね。その時、私は大学図書館係長として、たいへん不安な日々を過しておりました。そんな状態が続いた後に、その年の9月に、遠山敦子さんという文部省初の女性課長が誕生し、新たな情報図書館課長として就任されるんですね。この課長さんは後年、文部科学大臣になられます。

その遠山課長さんは、就任早々、情報図書館課長としてのミッションは何か、いま大学図書館界では何が最大の課題なのか、ということを真剣に考え抜くんですね。その結果、それは大学図書館における目録業務を合理化・省力化することと、図書館の情報提供機能を高めること、この二つのことを統合的に改革することであると結論づけるのです。そして、それを実現するためには、どのような施策をとったらよいのか。それはもう、学術審議会に掛けて国の事業として取り挙げていく以外にないとしました。

通常、この種の国家的な事業というものは、日本学術会議などの学会の代表機関から要望書のような形で政府に提出されたものを、役所が審議会に付議して具現化していくというのが常道ですが、このような大学図書館の改革に関する要望は当時どこからも出されていませんでした。そこで、情報図書館課では自前でそのシナリオをつくることを始めていきました。

それは遠山課長さんと田中専門員が中心になって、それに学術調査官の松村先生や研究助成課の中山専門員などのアドバイスを頂きながら進めていったんですね。そして、化学界の大御所である長倉先生を分科会長とする学術審議会で審議が行われて、翌年（1980年1月）にあの有名な答申「今後における学術情報システムの在り方について」が出されます。この答申が、以後の我が国図書館界の歴史を変える原点となります。

ところがここで行く手に思わぬ「壁」が現れるんですね。それは、この構想について説明に行った遠山情報図書館課長が、文部省の大臣官房長（故井内慶次郎氏）から「この構想は全く分らない」とクレームが付いてしまうんですね。大臣官房長がOKしてくれませんと、そもそも文部省から大蔵省に概算要求を出すことが出来ません。そこで、遠山課長は、何とかしてこれを突破すべく、大学の人に頼んで、素人にも分かり易いマンガの資料を作ってもらい、それを使って再度チャレンジしてこの第一の関門を突破します。次に、

政府の文教部会をも同時にクリアーしなければなりません。ところが、そこでもさっぱり理解してもらえず、課長が苦労しますが、同様にマンガの資料を使って説得します。

こうして行政側の段取りは何とかクリアーするのですが、今度は、肝心の大学の現場の研究者や図書館実務者から反対の声が沸き上がるんですね。「情報の国家統制につながるものである！」とか「カタロガーの仕事が奪われる！」とか、今から考えると時代錯誤も甚だしいものだったわけですが、遠山課長は大学へ直接出掛けて行って、それらの誤解や偏見を解いて回りました。その甲斐もあって、やがてそれらの反対論は影をひそめていきます。

そこで、遠山課長は、速やかにこのプロジェクトの実現に向けて大事な布石を打つために、この「学術情報システム構想」を実現するためには、実際、どのような具体的な仕組みが必要になるのかを、若手の研究者に集まっていただき検討するための「学術情報センターシステム開発調査研究協力者会議」を設置して、検討を開始します。

ところがこの段階で、遠山課長は不本意ながら役所の慣例によって、人事異動になってしまいますが、バトンタッチした後任の田保橋課長さんにしっかりと引き継がれて、昭和58年に東大にあった情報図書館学研究センターを改組して、「文献情報センター」を設置し、学術情報システム構想実現の中核となる中枢センターとしての「学術情報センター」の設立に向けて大きく前進していきます。そしてそれから３代後の西尾課長さんの時代（1986年４月）に、たいへん尽力していただいた結果、遂に学術情報センターが創設されます。

その初代の所長に就任されました猪瀬博先生（後、文化勲章受章）は、その就任挨拶の冒頭で、このセンター設立の目的は、第１に、全国の大学等の図書館の協力を得て、書誌ユーティリティの機能を果たし、一次情報の迅速かつ有効な利用を可能とするものである旨を述べられました。それから次第に、各大学の現場においても、このシステムの重要性についての認識が深まっていって、システム構築への協力も進んでいきました。その後、図書目録データベースと雑誌目録データベースのオンライン化を実現するなど、様ざまな事業展開が行われていくわけですが、平成４年（1992年）に待望のILLシステムが完成し、名実ともに書誌ユーティリティが完成することになります。

そして、このシステムの更なる拡充を期して、当時既にイギリスのオックスフォード大やケンブリッジ大、ロンドン大などとの間でNACSIS-CATの国際接続が実現しておりましたが、この出来たばかりのILLシステムと、私自身のかねての念願であったイギリスの世界最大の貸出図書館であるBLDSCの運用するART-Telとの国際接続を行うことを発意し、この年の秋に渡英し、先方と交渉しました。その経過については本日の配布資料にしたためてありますので、後でご覧いただきたいと思います。その結果、先方は最初渋っていたものの、日本側の提案の趣旨と実務上の可能性を理解して了解していただき、その２年後には宮澤先生やNACSISの目録情報課の方々のご尽力によってそれが実現することになります。その後、国公私立大学図書館協力委員会に所属する各大学図書館の実務者の方々のご努力によって、このILLシステムを利用して、OCLCを通じたアメリカの大学図書館や、KERISを介した韓国の大学図書館との国際接続が「GIF」（Global ILL Framework）プロジェクトとして進められていきます。（ppt.）

このようにして学術情報システムの基幹システムとして誕生した書誌ユーティリティは、現在、NACSIS-CATの参加機関は1,200機関を超え、所蔵レコードは１億件を突破しており、今や世界最大の書誌ユーティリティである米国のOCLCに次ぐ世界有数の書誌ユーティリティとして発展しております。（ppt.）

いまお話ししましたように、この我が国初の書誌ユーティリティが構築されるすべての過程において、様ざまな「壁」（文部省内部における拒否反応、大学の現場からの反対、システム構築の技術上の難点等）が出現したわけですが、これ

ら「三つの壁」（制度の壁、意識の壁、物理的な壁）を、文部省の行政官、大学図書館の実務者、NACSIS の研究者・実務者等、関係者の総力を結集したコラボレーションによって克服していったことがお分かりいただけたのではないかと思います。

④　県域レベルの館種を越えた図書館ネットワーク　―三重県図書館情報ネットワーク（MILAI）の構築―について

さて、私は平成５年４月に思いがけなく三重県に出向して、当時、急務とされていた県立図書館の移転新設を館長として担当することになりますが、そこで、県内の館種を越えた図書館ネットワークを構築し、その総合目録システム（MILAI）を実現させることになります。その経過についての概略をご紹介したいと思います。このことについては、お手許の配布資料の３番で詳しく紹介しておりますので、後ほどお読み頂きたいと思います。

まず、私は新設の県立図書館にとって一番大切な基本理念をどうするかについて考えて、「すべての図書館をすべての利用者に」とし、これを県内図書館の共通のスローガンにすることにして、その理念に基づいてネットワークを実現しようとしました。ところが、ここでも様ざまな問題や壁が現れました。まずもって肝心の図書館所管部署である県の教育委員会や財政当局の反対に遭うとともに、他方、折角、以前から三重大学の柴田教授のご指導を受けて県内公共図書館の実務者の間で検討を重ねてきていた総合目録システムの構想が肝心の各図書館の館長に殆ど通じていなかったなど、県内の市町村図書館の館長と館員の間の認識の乖離が明らかになり、基本的な部分でブレーキが掛かってしまいました。そこで、教育委員会に対しては繰り返し説得工作を重ねるとともに、一方では、市町村の図書館の館長で組織する「県内公共図書館協議会」を新たに設立して、館長さんたちに対してこの事柄の重要性についての認識を深めていただきました。そのようにして、この概念図にあるように館種を越えた図書館ネットワークを構築していきました。現在、県内の公共図書館、大学図書館、学校（高校）図書館等 116 館、それに県外の図書館 40 館を合わせて 156 の図書館がこのネットワークに参加しております。（ppt.）

⑤　県域・館種を越えた図書館ネットワーク

次は、東海地区図書館協議会の設立による県域・館種を越えた図書館ネットワークについてお話しします。これはこの３月まで名古屋大学の附属図書館長をしておりました伊藤先生のリーダーシップによって実現できたものですが、私も側面からお手伝いをさせていただいた関係もあって、現在も大きな関心を抱いております。実は、以前から東海・北陸地区には東海北陸地区公共図書館協議会という公共図書館だけの組織がありました。

今度は、その組織にクロスするような形で、静岡県を含めた東海地区だけで、県域を越えて大学図書館と公共図書館との館種を越えた、相互協力のネットワークを構築しました。愛知、岐阜、三重、静岡の４県の大学 23 館、公共 66 館、計 89 館の図書館が現在加盟しております。その実績を見ますと、大学から公共への依頼件数が、公共から大学への依頼件数を常に上回っているんですね（スライド参照）。開始してから３か年間における前者の平均伸び率は 22％、後者の平均伸び率は 48％となっていて、毎年、確実に増えていっていることが分ります。実は、最初このネットワークの話が持ち上がったときに、大学と公共とでネットワークを創るのは、いわゆる大学の社会貢献が目的であって、大学側にはあまりメリットはないのではないかという批判も一部にはあったんですね。ところが、実際に始めてみますと、このように逆に大学側からの依頼の方が上回っていたという実態が明らかになったんですね。大学図書館では、この ILL サービスを学部学生をも対象にしていることと考え合わせると、このデータは、大学図書館の集書が学部学生に対して必ずしも充実していないことの一つの現れであるとも見ることができると思います。その意味で、今後は大学図

書館の教育・学習機能を充実する観点からも、このネットワークを活用したILLサービスの充実を図っていくことが必要であり、そのためにも、まだこのネットワークに参加していない大学図書館におかれては、参加されるようお勧めいたします。

3．組織の総力を結集する。

①　戦略策定を可視化し、全学教職員が共有。

これは、前回（2007年11月）のこの研修でもご紹介したものですが、まず、話しの前提となる基礎的な知識として、職場における組織と、職員の職位との関係を簡単に見ておきたいと思います。図のように、大学の組織は大略、トップ、ミドル、スタッフに三分されます。そして、意思決定のスタイルとしては、一般的にトップダウンかボトムアップのいずれかのかたちが想定されます。けれども、ミドル・アップダウンというスタイルは何かといいますと、ミドル（すなわち、組織の中の部課長クラス）が、所管する業務に関して常に最も多くの情報を入手し得ると同時に、上司（館長、学長等）に対して直に進言できる立場、すなわち、上意下達と下意上達とを常に迅速に行える恰好の立場にいるという利点を活かして、率先して改革の発意と立案を実践していくというスタイルを指しています。これは一橋大学の野中郁次郎先生が提唱された理論で、いま先進的な様ざまな企業で実践されている手法です。そのことは＜参考文献＞の９番目に挙げておりますので、ぜひお読み頂ければと思います。

さて、最初に「SWOT分析」という言葉についてですが、これは元々、公共や非営利組織などにおける戦略策定に活用されてきた手法の一つで、最近では公共図書館でも図書館経営上の手法として注目され始めているものですが、この用語は組織の「強み」（Strength）、「弱み」（Weakness）と外部環境の「成長機会」（Opportunity）、「致死脅威」（Threat）の四語の頭文字をとって命名されているものです。戦略策定の手順としては、まず外部環境（O,T）について分析し、その後で内部要因（S,W）の分析を行って、それら４つの分析結果をマトリックスにして、互いの要素を掛け合わせて「成長戦略」、「改善戦略」、「退避戦略」、「撤退戦略」の４種の戦略を策定し、それらを基にして、組織の新たな「ミッション」と「ヴィジョン」を策定します。そして、その最終目標に向けて組織の全てに亘る改善計画を策定し、それらの戦略の全貌をこのように一望できる「成果体系図」という図にまとめ上げて、組織のすべての構成員が戦略についての共通認識を持つことができるようにします。（ppt.）この図では、ミッション、ヴィジョンを実現するために必要なドメインを８つ設けて、各ドメインごとに、第１層には基本目標を、第２層には行動目標を、そして第3層には個別計画をそれぞれ示すことにします。例えば、「教育・学習」のドメインでは、基本目標が○○で、それに基づく行動目標が○○で、そしてその目標の下に、個別・具体の計画が示されていく。同様に、図書館が深く関わっている「情報環境」のドメインでも、基本目標、行動目標、個別計画が体系的に示されます。これによって、全学の構成員は、全学の戦略の中での自分達の立位置はどこで、他の部署の戦略との関係はどうなっているか、という全体像を把握することが極めて容易に出来ることになります。以前ですと、自分の担当している事が、全学の中でどのような位置づけになっているのかが、全く、あるいはよく分からないままに、ただ上司の指示に従って遂行するだけというケースが少なくなかったのが、これを契機として、極めてクリアカットになり、モチベーションが高まるという利点があります。そのことを実践した結果をまとめてみると、「危機感を全学教職員が共有できた。」、「全学改革のグランドデザインが可視化され、各自・各部署のベクトルが明確になった。」「各計画の具体性、透明性を高めるとともに、各自の責任の所在を明確化することができた。」そして、「法人と教学との間のコミュニケーションと相互理解が促された。」ということが言えます。

そして、その成果の一つとして、幸いなことに、平成19年度における家政学部の食物栄養学科が学生の管理栄養士の国家試験合格率100％を

達成し、全国のトップに立つことができました。もちろん、これは、戦略策定時から計画の実践に至る全ての局面において常にその中心になってリーダーシップを発揮して下さった当時の酒井学科長のご尽力の賜物であるわけですが、何よりも関係者が一丸となって真剣に取り組んだ結果がこの成果となって現れたものであって、改革の手法の適否もさることながら、それをツールとして使いこなした構成員の総意が結集された賜物でもあったと思っております。

② 図書館職員と全学教職員・学生の協働。

最後に、お茶の水女子大学（私がこの３月まで改革・改善のお手伝いをしておりました。）での事例についてご紹介申し上げたいと思います。これにつきましても、前回のこの研修で学内・館内改革についての詳しい内容をご紹介しておりますので、そちらの記録を参照していただきたいと思いますが、その後の経過について簡単に補足しておきたいと思います。

まず、２年前（2007 年）に図書館の主導で全学の総力を挙げて実現しました機関リポジトリ（愛称「Tea Pot」）は、その後、順調にデータベースが充実してまいりまして、今そのデータは１万９千件を超えております。これは京大、九大に次いで全国の大学図書館では第３位であるということで、たいへん嬉しく思っております。また、これはただデータ量だけのことではなくて、様ざまな観点から審査して頂いた結果であるということでしで、たいへん誇らしく思っております。

それから、もう一つ、これはつい先だって横浜で開催されました今年度の「第 11 回図書館総合展」のポスターセッションにお茶大図書館も出展していたのですが、それが最優秀賞を受賞したということです。その中心になったのは愛称“リサちゃん”「LiSA」（Library Student Assistant）という、学生さん達による図書館サポート・メンバーで、館員とのコラボレーションによる日常活動を踏まえて、主体的になって作成してくれた優れたポスターと、それに基づくプレゼンテーションの成果が高く評価された結果でした。

「壁を壊した図書館～お茶大図書館活性化のヒ・ミ・ツ～」そのキャッチ・コピーは、次のように唱っています。「お茶大図書館が、『壁を壊して』作ったのは、ラーニング・コモンズやカフェだけではありません。前例や体制の壁など様ざまな『壁を蹴飛ばして』、学生 ILL の無料化、学生協働の LiSA インターンシッププログラムなど、次々と新たなことにチャレンジしています。利用者の気持ちに一番敏感なのは、現場に立つスタッフです。全てのスタッフが利用者の気持ちに敏感になること。スタッフが元気で前向きであること。やってみたいと思ったことにすばやく、楽しく取り組めること。それが『壁を壊した』お茶大図書館活性化の一番のポイントです。」そしてお茶大図書館が、いかに旧弊を打破して改革を実践してきたかということが、ビジュアルに実に分りやすく図解されております。そのことについては、大学のホームページにも詳しく出ておりますので、ぜひご覧になっていただきたいと思います。

これらの活動は、結局、図書館職員と、図書館を利用し育み支える学生さん達と教職員のすべての人達のひた向きな取り組みによって成り立つものであって、そのことを羽入館長と茂出木チームリーダー（旧課長職）のリーダーシップの下で現場の図書館職員全員が総力を挙げて取り組んだことが、成功の鍵となったものです。

４．おわりに（まとめに代えて）

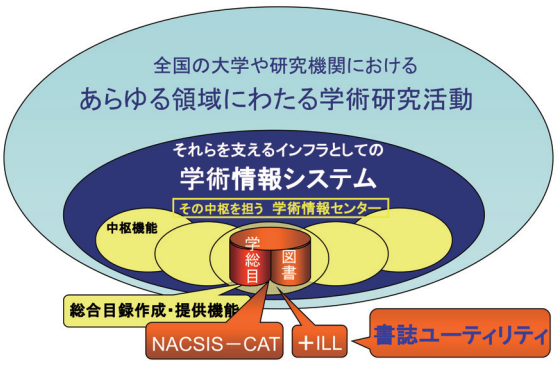
図書館は成長する有機体である。とランガナータンは「図書館学の第五法則」で述べております。大学図書館は今後一層の成長（改革・改善や新企画）が求められていくでしょう。その際、新たなサービスの創設や業務の改革・改善は、その必要性に気付いた者が、自分の頭で考えて、自ら可能なところから行動を起こしていくことが肝要です。しかし、行動を起こしている途中で、その行動を妨げる三つの壁が現れることがあります。そんな時には、強い使命感と情熱と意志力で乗り越えなければなりません。また、改革・改善はミドル・アップダウンなどのチームワークで取り組

むことが肝心です。そして、いずれの場合でも、目的達成のための最も重要なキーワードは、ミッション、ヴィジョン、パッション、アクションの四語です。

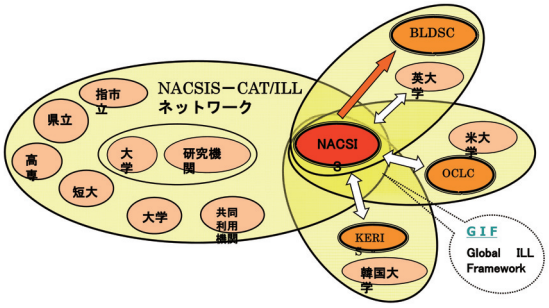
新任職員の皆さん方には、前途に無限の可能性が開かれておりますので、どうぞ想いを新たにして、これからの新しい時代に相応しい、成長する大学図書館の基軸として果敢にチャレンジして行かれることを期待しております。

（本稿は当日の講演に加筆修正を行ったものです。）

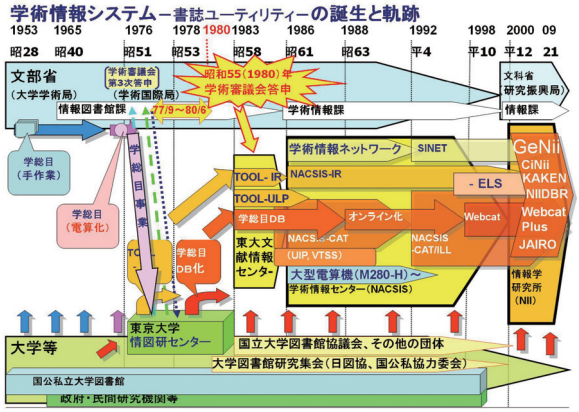
我が国の書誌ユーティリティ（概念図）



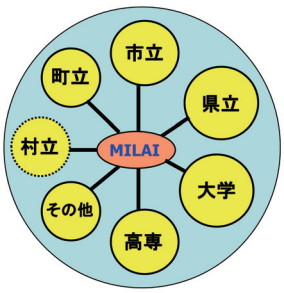
NACSIS-ILLの更なる国際展開



学術情報システム－書誌ユーティリティーの誕生と軌跡

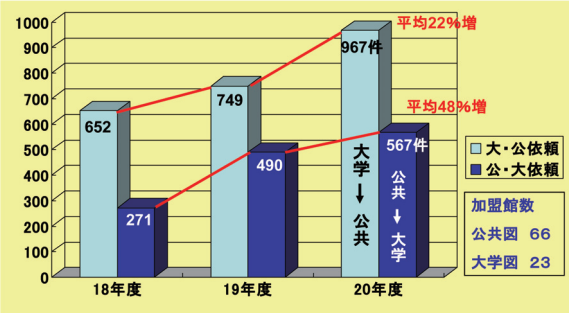


館種を越えた県内図書館情報ネットワーク（MILAI）の構築

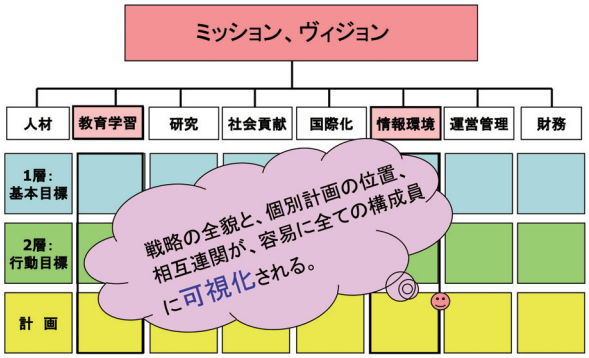


公共図書館	大学・学校等
県立図書館	三重大
いなべ市	県立看護大
桑名市	鈴鹿国際大
四日市市	鈴鹿医療大
鈴鹿市	三重中京大
亀山市	四日市大
津市	皇學館大
松阪市	高田短大
伊勢市	三重短大
鳥羽市	鈴鹿高専
志摩市	鳥羽商船高専
伊賀市	県立各高校等35館
名張市	その他類縁機関
尾鷲市	県外図書館40館
熊野市	
（9）町立	参加館合計　156館

東海地区図書館（協議会）ネットワークによる資料相互貸借（依頼件数）実績の経年推移



「成果体系図」（大学、学部）の作成（概念図）



＜参考文献＞
1．科学技術・学術審議会　学術分科会　研究環境基盤部会　学術情報基盤作業部会『大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について』（審議のまとめ）（平成 21 年７月、文部科学省）
2．同上『学術情報基盤の今後の在り方について』（報告）（平成 18 年３月 23 日、文部科学省）
3．井原　徹『私立大学の経営戦略序論―戦略的プランニングの展開―』（2008 年５月、日本エディタースクール出版部）
4．ゲイリー・ハメル、藤井清美訳『経営の未来－マネジメントをイノベーションせよ－』（2008 年２月、日本経済新聞出版社）
5．井部俊子『マネジメントの探求』（2007 年９月、ライフサポート社）
6．龍　慶昭、佐々木亮『大学の戦略的マネジメント』（2009 年５月、多賀出版）
7．逸村裕、竹内比呂也『変わりゆく大学図書館』（2005 年７月、勁草書房）
8．スティーブン・R・コヴィー『７つの習慣』（2004 年６月、キングベアー出版）
9．野中郁次郎、竹内弘高『知識創造企業』（2004 年３月、東洋経済新報社）
10. P.F. ドラッカー、上田惇生訳『マネジメント―基本と原則―』（2001 年 12 月、ダイヤモンド社）

講演要旨　平成21年度東海地区大学図書館協議会「図書館職員基礎研修」(2009.12.3)

大学図書館と広報
―デザイン・レイアウト―

名古屋造形大学　造形学部教授
渡　邊　敏　之

1．はじめに

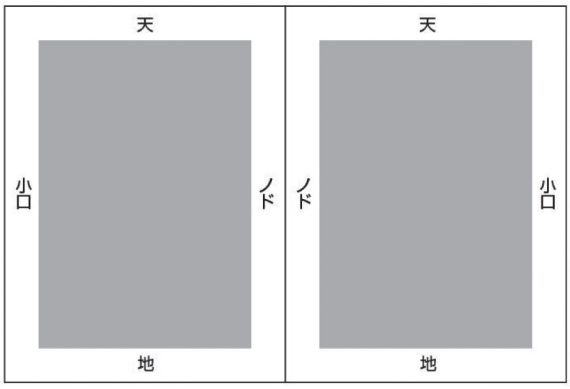
図書館広報とひとことで言っても実際に行う業務は様々な内容があります。と言うのは近年、図書館に限らず広報のためのメディア環境が大きく変化し、インターネットや携帯電話などのデジタルなメディアを広報に利用することが、必須の時代になってきているからです。

Webサイトや携帯サイトなどのデザインやレイアウトを何の基礎知識もなく行うことは気持ちの上でもとても高いハードルがあるため、本セミナーでは、なじみのペーパーメディア上でのデザイン・レイアウトについて具体的な例を出しながら伝えていき、手法によってはデジタルへの応用もできるように進めていきたいと考えています。

2．マージンと版面

レイアウトのはじめに、用紙全体に対して、天地左右の余白（マージン）の幅を決めます。

広報紙のようなほとんど厚みのない冊子の場合は、見開き内側の「ノド」部分が、製本時のとじによって呑み込まれて見えなくなる、ということがないので、ここをそれほど大きくとる必要はありません。



天地、小口、ノドの部分を総称としてマージンという。

（図１）

同時に、印刷物を制作する場合、印刷会社とのやりとりの中で専門用語を使うことで情報伝達のミスを減らし、コミュニケーションをスムーズにする必要があるため、ひとつひとつの用語の意味をしっかりと理解し覚えるとよいでしょう。

マージンの幅を決めると版面が決まるので、この版面の中でどのようにレイアウトするのかを考えればよくなります。また、基本的に一冊の冊子は全て同じマージンと版面で統一して制作します。

3．図版と文字の関係

情報要素を配置するときの２大要素、ひとつは「文字」で、もうひとつは「図版」です。図版とは写真やイラスト、説明図など、情報をビジュアル化して伝える要素のことです。この図版をどの程度の割合で版面に入れるかを考えます。見開きに対して図版が占める割合を「図版率」と言い、図版の占める割合が多い（図版率が高い）と「見せる構成」、逆に図版率の占める割合が少ない（図版率が低い）と「読ませる構成」となります。

図版率の高い見開きの例。

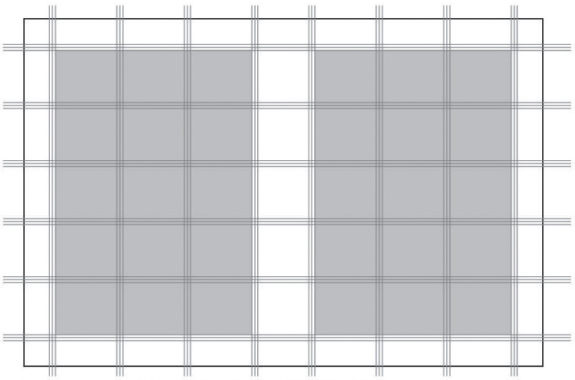
（図２）

図版率の低い見開きの例。

（図３）

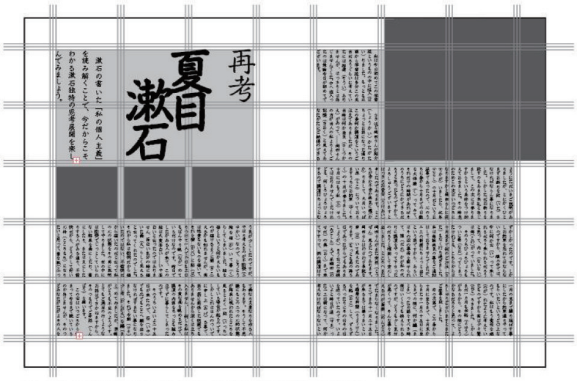
４．グリッドで考える

レイアウトをする手法には様々なものがありますが、ここでは「グリッドシステム」というスイスのグラフィックデザイナーである、ヨゼフ・ミューラー・ブロックマンが提案した手法を使ってみましょう。



グリッドはコマの大きさが同じになるように制作する。

（図４）



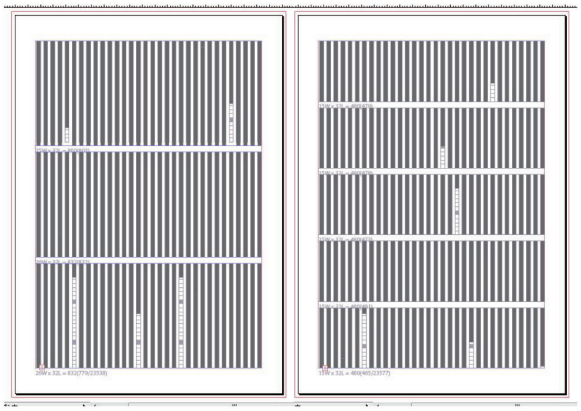
タイトルは文字枠ではなく文字自体の位置を確認。

（図５）

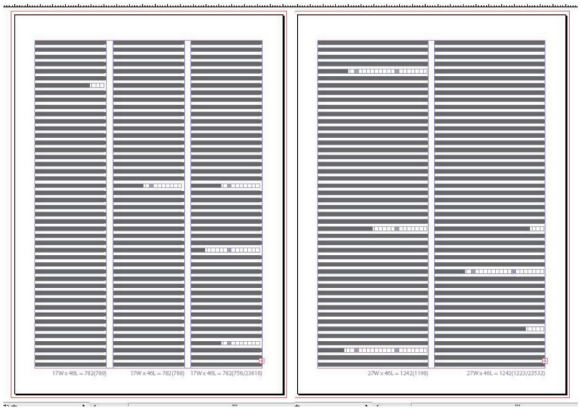
この手法は、水平と垂直にガイドを引き、基準となるガイドラインを決め、版面の中をさらに細かい面で区切り、その面を１つの単位とし２つ、３つ、４つ、などのまとまりを作ることで版面を美しく整った状態で分割することができます。

５．段組み

文字本文を、縦組み横組みにかかわらず構成する際に、何段で組むかというのが段組みです。１段は本文１行を何文字で組むかを決めることでその長さが決まりますが、段間の余白部分を含めて版面に対してちょうどよく割り切れるように計算する必要があります。



（図６）



（図７）

この段組みしたフォーマットをベースにグリッドの水平、垂直のガイドを引き、基準を作る手法が現在最も多く行われている手法です。

６．要素の優先順位

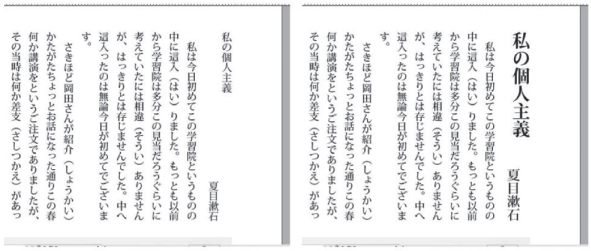
写真もイラストも文字も、読者に見せたい優先順位をつけることでその箇所のテーマをはっきり

させることができます。

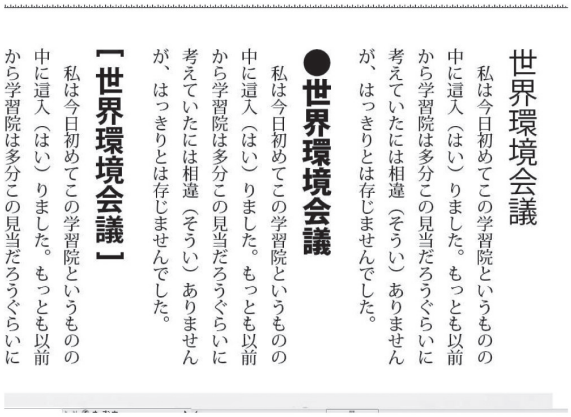
基本的には要素の大きさに変化をつけることで優先順位をつけることが可能です。

（図８）

文字要素の場合には、書体の太さで変えたり、色を変えたりすることでも表現できます。



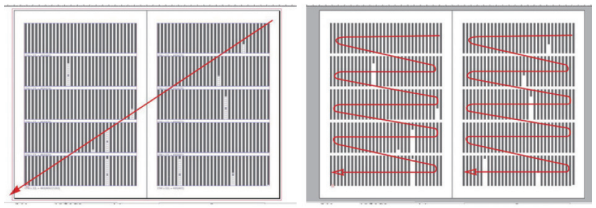
（図９）



（図 10）

7．視線誘導の基本

冊子を読むとき、多くの読者の視線移動は経験的に共通のパターンで動くことがわかっています。この視線の流れをスムーズに読み進められるようなレイアウトを行うことが、読者に負担を強いない優れたレイアウトのデザインだと言えます。逆に混乱を招くようなレイアウトの場合は、どんなに素晴らしい記事内容であっても、読者はすぐに読むのをやめてしまうでしょう。



（図 11）

下の左図のように、図版の位置によって読み進めるべき場所を迷わせるようなレイアウトは、記事の世界に中に入り込んでいた読者の気持ちを中断させてしまう例です。

（図 12）

8．余白

レイアウトの作業をしているときに、余白ができるとなんだか「寂しい」気持ちになって、そこに意味のない何らかのイラストや写真を埋めたいと思ってしまうことがありますが、これは計画的にレイアウトが行われていないのと同時に余白に対する誤った認識が意識の中に根付いてしまっている可能性があるので、気を付けなければなりません。余白は意図して作るものです。余白を作ることによって、見開き全体の視覚的な圧迫感を減らしたり、形状の変化を付けたり、空間に広がりを与えて高級感を出したりすることができるのです。

（図 13）

9．まとめる方法

ひとつの見開きの中で、ある一部分にある複数の要素を、他の要素としっかり分けるために、罫

線や地色を使ってゾーンづくりをすることで、整理された効果的なまとまりを作ることができます。下図右側のようにまとめるとよいでしょう。

（図 14）

10. とにかく揃える

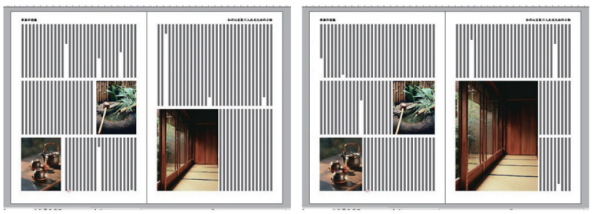
要素と要素の縦のライン、横のラインを強引に揃えることで、整然とした印象を与えることができます。

（図 15）

（図 16）

11. 複数ページのコーナー

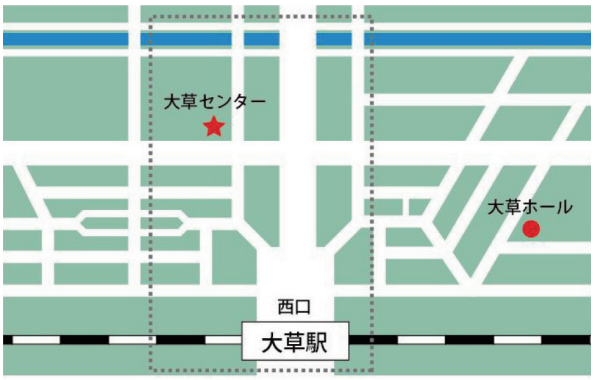
複数ページ、複数見開きにわたるコーナーの場合、レイアウトや書体を統一し、各ページの上部にネームをつけることによって、ページ間のつながりを印象付けます。



（図 17）

12. 地図

地図は、何を伝える地図なのかその目的を明確に意識しながら制作します。狭いエリアの地図は、航空写真に正確に作ってしまうと情報が複雑になりすぎてわかりづらくなってしまう場合があります。道路や路線などの太さや方向を整理してシンプルで目的のわかりやすい地図を作りましょう。



（図 18）

（図 19）

13. 表を工夫

地図と同じように表も、見せたい伝えたい部分があるとすれば、そのポイントを読者がなるべく短時間で読み取れるようにする工夫が大切です。具体的にはモノクロ印刷の場合、グレーのアミで表現したり、文字の太さを変えたりし、カラー印刷の場合はシンプルに下線を引いたり文字に色をつけたりします。

人口推移	男	女
2001 年	20,120	19,132
2002 年	20,191	19,161
2003 年	20,233	19,198
2004 年	20,346	19,246
2005 年	20,411	19,297
2006 年	20,393	19,315
2007 年	20,370	19,281
2008 年	20,314	19,223

人口推移	男	女
2001 年	20,120	19,132
2002 年	20,191	19,161
2003 年	20,233	19,198
2004 年	20,346	19,246
2005 年	20,411	19,297
2006 年	20,393	19,315
2007 年	20,370	19,281
2008 年	20,314	19,223

（図 20）

人口推移	男	女
2001 年	20,120	19,132
2002 年	20,191	19,161
2003 年	20,233	19,198
2004 年	20,346	19,246
2005 年	20,411	19,297
2006 年	20,393	19,315
2007 年	20,370	19,281
2008 年	20,314	19,223

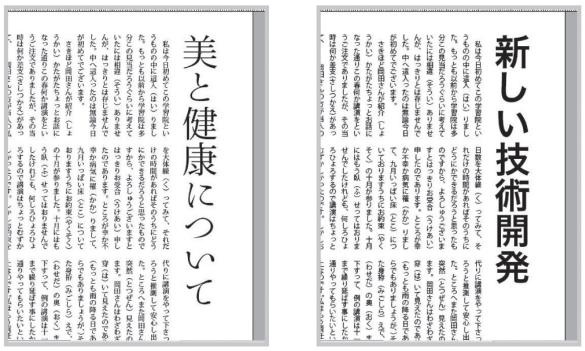
人口推移	男	女
2001 年	20,120	19,132
2002 年	20,191	19,161
2003 年	20,233	19,198
2004 年	20,346	19,246
2005 年	20,411	19,297
2006 年	20,393	19,315
2007 年	20,370	19,281
2008 年	20,314	19,223

（図 21）

14. 書体とイメージ

パソコン上でグラフィックデザインに利用できる（すなわち印刷に対応している）日本語の書体セット（フォント）は、現在数百種類にまで増えていますが、1989 年に初めて登場した時には、細明朝体と中ゴシック体という 2 種類だけしかありませんでした。ここでは日本語書体の基本である明朝系書体とゴシック系書体を文面や見出しとして使う場合に、読者に与える印象を理解することで、記事の内容によって書体を使い分ける基礎力をつけます。

明朝系書体は、情緒的で落ち着いた印象を与えます。ゆっくりしっとりとした内容を伝える場合や、感覚に訴えたい場合に向いています。逆にゴシック体は、力強い印象を与えたい場合や、情報の正確さを意識してもらいたい場合に向いています。



（図 22）

（図 23）

個性の強いデザイン書体は、内容よりも前に出てしまう可能性があるため使いすぎないように注意しましょう。

15. 見出し

見出し用の文字組みは、本文などに比べてサイズが大きいため、読者から細かい部分までよく見えてしまいます。普通に入力したままの文字組みでは、どうしてもバラつきのある印象を与えてしまうので、調整を行う必要があります。

約物（かっこや句読点など）だけを別の書体にしたり、文字位置（文字間隔）を詰めたり広げたりすることで違和感のないまとまった印象の見出しを制作します。

市民生活について振り返る
市民生活について振り返る

（図 24）

こんにちは、ミスターチャーリー
こんにちは、ミスターチャーリー

こんにちは、ミスターチャーリー
こんにちは、ミスターチャーリー

（図 25）

16. まとめ

事前に各大学図書館で制作された広報ツールのデザインについてチェックし、具体的な修正箇所や修正方法などについて、短い時間でしたがアドバイスをしました。ここで説明した内容だけを行えば一朝一夕で美しく伝わりやすい広報ツールが簡単に制作できるということではありませんが、基礎的なポイントを知ることで、今後のデザイン・制作業務の中での小さな足がかりにしてもらえればと思います。

デザインは楽しい作業ですが、注意していないと思い込みによる独りよがりの物作りになってしまうことがあります。今制作しているものは、それを使うまたは読む相手がいるのだ、ということを忘れずに制作してほしいと思います。

紙資料の保存修復

（財）元興寺文化財研究所
金　山　正　子

紙資料の保存修復を効率よく進めるためには、事前に所蔵資料の劣化の状態を調査して、処置しなければならない資料がどの程度あるのか、全体的な傾向を把握したうえで計画をたてる必要がある。また、保存の前提として、できるだけ劣化させないために、資料の保護措置や環境改善などの予防に留意すべきである。

⑴　保存環境のチェック

まず劣化の原因となる要因を認識し、その劣化の原因を除去あるいはコントロールしていく必要がある。一般的に紙資料の保存に適した条件は、温度20～22℃程度・湿度RH55±5％程度とされる。しかし、その環境を恒常的に維持することは、24時間空調を実施しない限り困難である。急激な温湿度変化の繰り返しは、より資料へのストレスを与えることになるので、空調のON・OFFなどによる1日間の変動を極力抑え、温度の緩やかな変化に伴った湿度管理に重点をおいて、温湿度環境を管理することでカビの活動条件にしない工夫が必要である。例えば、除湿機のみを稼動させてカビの発育を避ける、資料を保存箱に収納して直接触れる空気・光を遮断し資料の防護をする、収蔵庫内の空気を流通させ湿気をたまらせない、などである。

ＩＰＭ法（Integrated Pest Management 総合的有害生物管理）とは、環境管理で資料を虫菌害から守る考え方である。虫菌害の回避、虫の侵入を遮断、発見した場合の処置、定期的なモニタリングと記録の各プログラムを実施することで、資料を虫害から護る。

真菌類のモニタリングの具体的な方法には、真菌類の拭き取り調査・空中の真菌類の採取などがある。真菌類の被害を防ぐには発育させない環境を保つことが必要で、そのためには湿度を下げる、結露させない、換気する、栄養源をなくすことがポイントである。

もしカビが発生した場合、汚染資料が少量ならば現場での手作業によるクリーニングが可能である。まず汚染した資料を隔離し、作業場所を確保してエタノール（60～70％）でクリーニングする。カビが発生している資料は収蔵庫の外に隔離しなければ、汚染範囲は拡大する。棚板などもエタノールで拭いて殺菌する。喚起のよい作業場所を確保して、刷毛、布、掃除機、空気清浄機などを用意してカビのクリーニング作業を行なう。

害虫の有無を確認するためのモニタリングには、収蔵庫に害虫トラップをしかける方法がシンプルな方法である。もし実際に害虫が捕獲された場合には、トラップの範囲を広げ、害虫の侵入進路を確認して遮断措置を講じる必要がある。

収蔵庫内の空気が酸性雰囲気かアルカリ性雰囲気かを確認するには、試薬を24時間露呈する環境モニターが有効である。もし酸性雰囲気が強く示され資料への影響が懸念される場合は、詳細に汚染物質を特定しなければならない。収蔵庫内の有害物質の測定は、専門業者へ依頼する必要がある。収蔵庫内を汚染している化学物質としては、空調などをとおして外気からのＮＯｘ・ＳＯｘ・粉塵などの流入、建材などから発生するホルムアルデヒド・アンモニア・有機酸など、燻蒸による臭化メチルなどが考えられる。

具体的な環境改善の措置としては、収蔵庫の密閉性を確保すること、箱入れなど資料の防護措置と外環境からの緩衝を図り、資料に直接触れる空気・光を遮断すること、収蔵庫内の汚染物質の除

去をして空気の入れ替えを行うこと、たとえば空調へのHEPAフィルターの設置などがあげられる。

光（紫外線）の遮断、空調の調節・再検討、保管庫の改装（断熱材・調湿材の使用）など長期的に検討することが必要であるが、基本はなんといっても日常的な資料のクリーニングと保管場所の掃除であり、こればかりは人手を確保しなければならない。

⑵　資料の状態調査

現在、資料にどのような劣化が生じており、将来的にどのような保存措置が必要とされるのか、またそのためのコストを積算するために状態調査を行う。

資料の状態調査の項目例（調査票）

資料番号　作成年代　表題　ラベル（有無、記入事項）銘（有無、記載場所）　寸法（X × Y × Z ㎜）数量　重量　収納寸法　附属品（有無、寸法）材質（木・竹・布・紙・皮革・金属・その他）資料の劣化状況　劣化の特徴（気づいた点をメモ）耐光性（強弱、光に弱い部位）強度（強弱、衝撃に弱い部位）最長展示期間　その他注意点　過去の補修（有無）その他の特徴　必要な保存処置（クリーニング、裏打ち、漉嵌、部分繕い、再製本、封筒・箱入れ　etc.）

他に必要に応じて紙資料詳細調査項目：紙の劣化度（国会図書館がミシガン大学の３段階判定を改良した５段階の判定基準に準拠）・ｐＨ値・インクの劣化度など

記録素材の変遷をみると、江戸時代までは墨、岩絵具、草木染めなどが多く使用されている。墨や岩絵具は比較的保存性が高いが、染料は褪色しやすい傾向がある。岩絵具でも緑青などの金属成分が含まれるものには、酸化による変色や腐食を生じやすいものもある。幕末から明治期にかけては、海外で開発された合成絵具が輸入されはじめ、これらには変褪色しやすいものが多い。

近現代になるとさまざまな工業用品が開発製造され、記録方法も多様化してくる。筆記用具、印刷・複写機器、薬品を使った複写現像、などで、保存寿命の短いもの多い。

明治になるとそれまでの和紙中心の文化から、洋紙の多用へと状況が変化してくる。記録資料に使われている和紙と洋紙の特徴を比較した。

	和　紙	洋　紙
国内の製造	日本に伝来してきた製紙手法（手漉き）	明治以降の製紙業の導入と発展
原料	楮・三椏・雁皮などの靭皮繊維	木材パルプ（機械パルプ、化学パルプ） 原料の多様化（綿、麻、藁、なども使用）
酸性度	伝統的手漉き和紙は弱アルカリ性 近代以降のものは弱酸性のものも多い	印刷用につくられた洋紙は酸性のものが多い（酸性サイズ剤による←中性サイズ剤普及まで）
近代以降の特徴	機械漉きのパルプ混入のものあり 滲み止め処理による酸性のものも多い	明治初期は輸入原料による高品質のものが多い 第二次大戦中・後期は原料不足のため下級紙が増す平成以降の再生紙の普及が今後の要注意か？
劣化症状	虫損　フォクシング 水濡れ跡　カビ 老け　etc.	酸性劣化（硬化、亀裂）　茶変色　etc.

表１　和紙と洋紙の特徴

洋紙の酸性劣化は大量に残存する課題である。洋紙の製造過程で加えられる印刷インキの滲み止めの定着剤である硫酸バンドにより、経年によって紙自身の酸加水分解が進み、さらに紙の成分であるセルロースが再結晶化するために紙が硬くなる。柔軟性がなくなった紙は、力が加わりやすい周囲から亀裂が入りやすくなる。さらに酸性劣化が進むと、紙自体がポロポロとくずれている。このような劣化症状は「スローファイヤー」と言われている。

木材の成分をそのまま含んだ機械パルプと、不純物を除去した化学パルプの比率で、下級紙から上質紙の区分けがなされる。下級紙に酸性紙が多いのは、印刷インクの定着剤に使用された酸性サイズ剤の影響があるが、生産量の多さ、つまりは残存量の多さもあげられる。

	機械パルプ	化学パルプ
原料	木材をすりつぶし原料としたもの。主に針葉樹が使われる。	木材を薬品処理して不純物を除去して原料としたもの。
変色	リグニンを含み、光にあたると紙が茶変色しやすくなる。	リグニンをほとんど含まず、紙が茶変色しにくい。
紙の特徴	繊維長が短く、かさ高い紙ができ、紙力が弱い。新聞用紙、ザラ紙などの中・下級紙。インクの吸収がよいので謄写版に多用されている。	繊維長が長く、強度があり、印刷適性が良い。上質紙。印刷用紙、筆記用紙、包装紙など、用途が広い。

表２　機械パルプと化学パルプ

昭和30年台にはさまざまな複写機器が開発され、多用な複写資料が残存しているが、光による変褪色などの劣化症状を呈しているものが多い。複写資料の特徴を比較した。

	こんにゃく版	青図（シアノタイプ）	青焼き（ジアゾ式コピー）	湿式コピー
用紙	上質紙が多い	上質紙（感光性鉄化合物を上質紙に塗布した用紙）	上質紙（感光性ジアゾ化合物を上質紙に塗布した用紙）	上質紙（酸化亜鉛紙）
印字方法	原紙に書いたメチルバイオレットを物理的に転写	原紙と重ねて感光（湿式）	原紙と重ねて感光（湿式）	原紙と重ねて感光（湿式）
外見の特徴	紫色の印字。初期は筆文字のものが多い。	濃青地に白抜き（ネガタイプ）の印字が多い。ポジタイプも有	白地に紫・青色の印字が多い。茶・赤・黒など他の色もある。	白地に黒色の印字
褪色	褪色しやすい	通常保管なら比較的褪色しにくい	褪色しやすい	褪色しやすい
劣化の特徴	文字が褪色して判読できない。	画像が薄れる。折り目の変色など。	画像が薄れる。薬品の褐変色がみられる。	文字部分が褪色。全体的な茶変色や、銀鏡化もみられる。

表３　複写資料の比較

最近研究の進んできた分野としては、没食子インク（Iron gall ink）の劣化があげられる。没食子とはブナ科植物の若芽にできるこぶでタンニンを多く含み、鉄硫酸塩、ゴム、水などと配合し、タンニン酸第一鉄が徐々に酸化してタンニン酸第二鉄になり黒色化する化学反応を利用して、中世以降から多様なインクが作られた。日本でも明治以降に輸入、製造され始めたブルーブラックインクがそれである。鉄分の酸化が進行すると、インクの茶変色、裏面への移り、インク部分の硬化、結晶化、亀裂、欠落などの劣化症状が顕著になる。

その他、いろいろな劣化症状の実例を紹介した。虫損、老け、フォクシング、カビ、下級紙の茶変色、酸性劣化、緑青焼け、こんにゃく版の褪色、青焼きの褪色、青図の変色、湿式コピーの銀鏡化、インク焼けなど。

これまでの状態調査でわかったことをまとめると以下の点があげられる。

①昭和20年代の酸性劣化の顕著な下級紙が多い。起案文書にも下級紙が使われるのは府県レベルに多い。この時期に多い下級紙の謄写版は、酸性劣化が顕著になる前に脱酸を施す必要がある。

②簿冊の種類と年代で、用紙と記録素材の組合せ、劣化の傾向が把握できた。

③実際の劣化症状が深刻なのは、添付資料として編綴されている昭和30～40年代の複写資料類であった。これらは保護措置で劣化を抑制するとともに、今のところ媒体変換しか維持手段はない。

④用紙の経年劣化よりも、無理な形態による損傷や保管中のホコリの堆積などのほうが全体的には影響が大きい。これらは防げない劣化ではなく、日常のクリーニングと保護措置の必要性を再認識させた。

状態調査に伴い、今後必要な保存処置を選定していく。それぞれの資料の劣化損傷にたいして必要と思われる保存処置を判定するが、必ずしも劣化の度合いだけで優先順位を決めるのではなく、利用頻度や劣化の進行性も考慮して緊急度を判定していく必要がある。緊急度の高い劣化としては、進行性のカビ、錆、酸性劣化、インク劣化な

どがあげられる。

資料の保護・防護措置である封筒や箱入れは、外環境から資料を保護し、取り扱いの便宜をはかる、あるいは人為的損傷をさけることができる。保護用品は資料に直接触れるものなので、長期にわたって資料に影響のない安全な材質を慎重に選定する必要がある。保存封筒や保存箱には中性紙・無酸紙を使用する。一般でよく目にする茶封筒は酸性のものが多く、資料を酸化・茶変色させるので使用は避ける。資料を括る紐は、綿テープが柔らかく適しているが、漂白剤の使われていないものを選ぶ。ラベル・糊は中性のものを選び、ラベルへの筆記用具は滲まないもの、糊は再度剥離できるものを使用する。

⑶　修復技術と事例紹介

保存修復は以下の４原則をできるだけ遵守する。

①原形を尊重する

できる限りオリジナルの形態や素材を替えない、つまり、使えるものは使う。

②安全な材料・技法

材料や技法は、長期的に安定した非破壊的なものを選ぶ。

③可逆性のある技法

資料を修復する前の状態にもどせる修復技法や材料を適用する。

④修復記録を残す

修復前・後の状態、写真、修復仕様、形態を変更した箇所などを記録に残す。また、修復記録は次の修復の際に参照できるように、資料とともに管理する。

紙資料の修復技法を紹介する。和紙と糊を使った伝統的な修復技法には、裏打ち、繕いなどの方法がある。

最近、適用例も多くなってきたものに、リーフキャスティング（漉嵌・すきばめ）という技法がある。これは、吸引による水の流れを利用して、水に分散させた紙繊維を本紙の欠損部分に補填する技法である。特徴としては、処理前よりも厚みがほとんど増えないこと、また糊を使わないのでしなやかに仕上がるため、虫損の甚だしい文書や冊子の修復に適している。国内では水頭差式と吸引式の二つのタイプが稼動している。

写真１　裏打ち

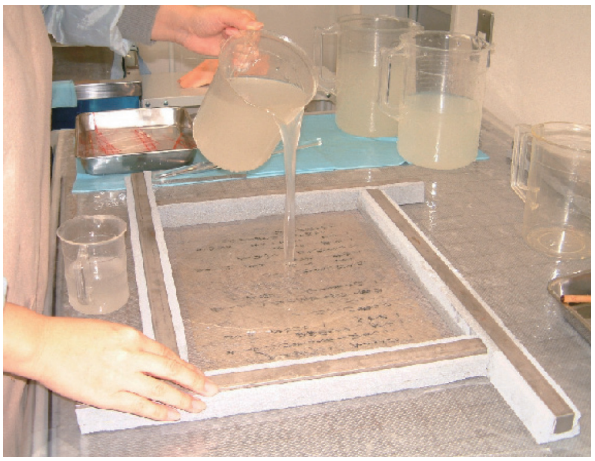


写真２　漉嵌（すきばめ）

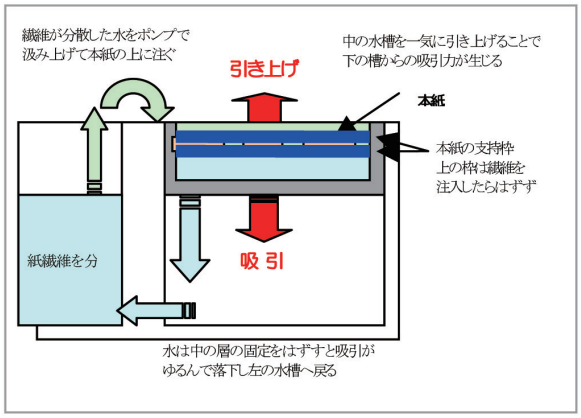


図１　水頭差式のリーフキャスティングマシン略図

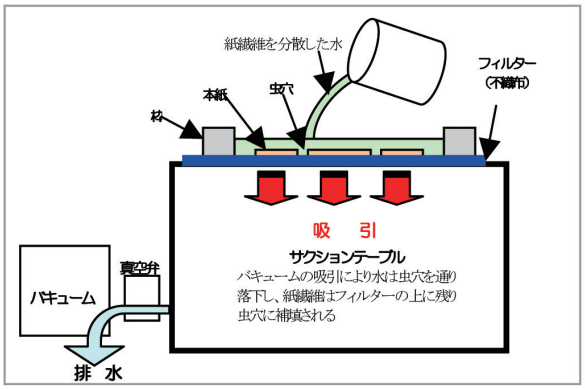


図２　強制吸引式の漉嵌機略図

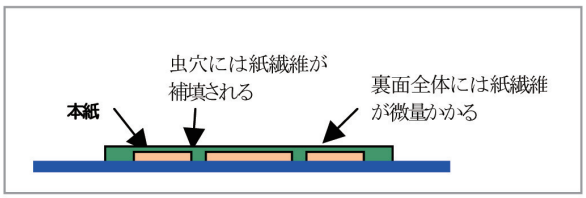


図３　処理後の断面

ペーパースプリットという技法は、その名のごとく紙を剥ぐ方法である。本紙を物理的に表・裏に剥ぎ、その間に補強紙を挟んで貼り合わせる強化方法で、酸性劣化やインク焼けで脆弱になった紙の強化に適しており、リーフキャスティングとの併用が可能である。国内では大量処理は稼動していないがマニュアル（手作業）処理は実施されている。

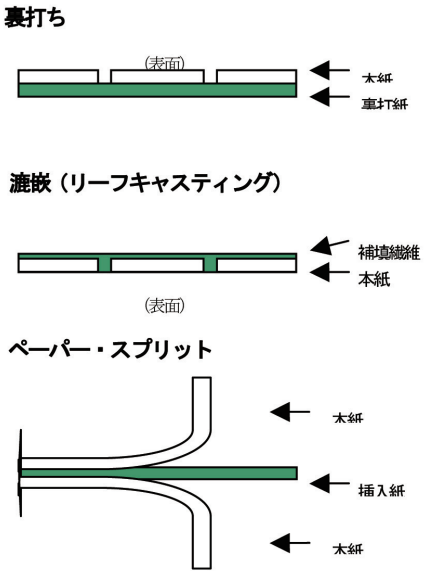


図４　強化方法の比較図

真空凍結乾燥法は修復技術ではないが、水に濡れた資料の乾燥が可能で、水害などの緊急対応として稼動することが多い。水に濡れたしまった紙史料はできるだけ吸い取り紙を頁間に挟む手作業で乾燥を進めるのが安全だが、早期に着手できない場合や大量に被害が生じた場合には、できるだけ薄めに小分けした資料をアルミホイルで包み凍結させる。その後、真空凍結乾燥機にいれて氷の層を気化させて水分を乾燥させる。

酸性紙を長期保存するためには弱アルカリ性に紙を中和する脱酸処理を施す必要がある。脱酸処理には、アルカリ性薬品で紙の中の酸を中和し弱アルカリ性に調整し、アルカリバッファーを残す水性脱酸法と、揮発性の希釈剤でアルカリ性薬品を紙に残留させる非水性脱酸法がある。

インク劣化で腐食の進んでしまった資料は裏打ちやリーフキャスティング、ペーペースプリットなどの物理的な強化を施すしかないが、将来的に劣化が予想されるインク書き資料には、フィチン酸カルシウム溶液などでの非抗酸化処理を施し予防することが可能である。劣化の予想には、インクの鉄イオンを試験する方法が開発されている。

保存処理の事例紹介

①虫損の甚だしい古文書の修復

１枚ずつヘラやピンセットで展開して漉嵌法で虫穴を補填する。乾燥後、２～３ｍｍ程度周囲に余白を残して裁断し、元の冊子に仕立てる。表紙など、傷んでいても修復して再び使える部分は再使用する。仕立てはできるだけ原形を復元する。

②酸性劣化したポスターの修復

硬化して亀裂の入った部分には、細く切った和紙を亀裂部分に沿って裏面に貼り強化する。漉嵌法で周囲を補填し全体を強化する。脱酸処理は顔料や印刷が変化しないようであれば水性脱酸を行なうが、変褪色するものは非水性脱酸で処理する。

③再製本

最近はデジタル変換などの代替化にともなう解体修復が多くなった。公文書簿冊などはさまざまな形態のものがあり、解体時に紐の通し方や結び

目の位置などの記録をとっておかないと、再製本時に復元が困難となる。編綴形態は役所や種類によって使い分けられている場合もあり、出所を確認する比較情報となるので、むやみに変更しないように留意する。

④過去の火災で被災した資料の修復

水と泥で固着した折帖の本紙の剥離は、水よりも小さな粒子である蒸気を当てながら加湿し、1枚ずつ破片を剥離する。漉嵌、仕立て後、甚だしく傷んでいた表紙（裂）を新調したが、旧裂も今となっては入手できない古裂であり、修復後の資料と一緒に桐箱内に収まるように収納した。

⑤穴蔵から発掘された御用日記の修復

18世紀半ばの穴蔵の遺構から出土した炭化文書で、水に浸かった状態で出土した。大量に炭化していたのは、火災の時に穴蔵で蒸し焼き状態になったためと思われる。それらを1冊ずつ凍結したのち真空凍結乾燥機で乾燥し、1枚ずつ剥離して漉嵌後、メチルセルロースで強化した。表面は炭化して真っ黒であるが、デジタルカメラで撮影し画像処理で調整すると、文字は判読できる程度には再現できた。

修復の事例をとおして、先に述べた保存修復の4原則に沿って、どのような修復技法を選択すればよいのか、なにを記録すればよいのかを紹介した。

⑷ まとめ

研修会では、保存環境、状態調査、修復技法についてご説明した。資料を管理する方々にも修復技術の違いについて理解していただき、それぞれの資料の損傷の状況に適した方法をみずから判断して選択していただきたいと思う。修復のためのコストを有効に配分するとともに、将来にわたって資料をなるべく傷めずに保管するためには環境の改善が必要となる。それは、かなり内部での理解と努力と工夫を必要とするものである。

図書館でも文書館でも他の施設でも、全体的な予算管理のもとであらゆる事業計画がたてられ優先順位をもって実施されている。資料の保存管理も例外ではなく、長期的な方針をたて、短期的な計画をたてて実施することになる。そのためには、各所での実情を自ら把握することは必須であり、それが資料の現在の劣化状態を把握するための状態調査である。現状把握のうえで分析を加え、今後必要となる措置を想定し、利用頻度や緊急性を考慮したうえで優先順位をつけていく。そこではじめて必要な予算措置が組める。

また将来的な管理を考えた場合、修復という非常に1点ごとに手間隙かかる（つまりはコストがかかる）処理に莫大な予算を投ずるよりも、劣化させない予防措置に今予算を投じるほうが、長期的にみた場合、はるかに省コストにつながることが理解されるであろう。環境管理や資料の保護措置は、予防の最大の決め手となる。

資料保存は、人が資料に目配せと手当てをすることで成り立ってきた。さまざまな利用に便利な機器が開発されようとも、資料そのものの管理は人手に頼らざるを得ない部分が多く、これからもそれは変わらないだろう。「予算」という概念の中に「人手」つまり所蔵側の職員も含めた人件費もその概念に入れて検討すべきである。

以上、研修会の報告とともに、まとめとして全体の捉え方について触れた。どこの図書館や文書館でも資料保存を一生懸命考えている方々がおられ、できることは地道に進めている。しかし、どこかで大きく手を打たないと、資料の劣化を目の当たりにしながらも手をこまねいているしかない壁につきあたるのも現実である。「予算」という大きな制限があるのならば、その予算を確保するための戦術を練るしかない。では、何のためにどのような予算がどれくらい必要なのか、一から積算を積み上げてみれば、さまざまな問題点とともに解決案もみえてくるのではないだろうか。ぜひお試しいただきたいと思います。

事 例 報 告　第 64 回（2010 年度）東海地区大学図書館協議会研究集会（2010.8.26）

がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの観察日記
―筑波大学附属図書館でのキャラクター活用事例―

筑波大学附属図書館情報管理課
嶋　田　　晋

1．はじめに

筑波大学附属図書館では、平成 18（2006）年４月より「キャラクター」を導入している。ガマ（カエル）をモチーフにした「がまじゃんぱー」とチューリップ（花）をモチーフにした「ちゅーりっぷさん」である。筑波大学附属図書館ではこれらのキャラクターを活用することで、利用者からの注目を集めやすくなり、同時に職員の広報意識を高めることができた[1) 2)]。

また、図書館界隈で著名なブロガーがこのキャラクターに注目しブログで取り上げた[3)]ことにより、筑波大学附属図書館外での知名度も高まり、がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんは名実ともに筑波大学附属図書館の「顔」となることができた。

本稿では、キャラクター誕生の経緯や作成にあたって苦心した点、キャラクターの評判や今後の展開、また実際の活用例について解説する。

2．がまじゃんぱーとちゅーりっぷさん って誰？

「がまじゃんぱー」と「ちゅーりっぷさん」とは、筑波大学附属図書館が作成した「キャラクター」である。

「がまじゃんぱー」はガマ（カエル）をモチーフとしたキャラクターである。筑波山麓に生息する四六のガマから作られたとされる「がまの油」売りの口上は有名であり、古典落語の題材になったり伝統芸能として披露されたりしている。そのため、筑波山といえば「がまの油」やガマ（ガマガエル）が連想されることが多く（筑波山の土産物としても販売されている）、それに由来している。一方、「ちゅーりっぷさん」はチューリップ（花）をモチーフにしたキャラクターである。筑波大学附属図書館の愛称を「Tulips」（Tsukuba University Library Information Public Service）という。長年親しまれ教員などには浸透した名称となっていて、そこに由来する。

作成当初は特に公式のプロフィールを作成・公開してはいなかったが、後に図１、図２のようなプロフィールを公開した。

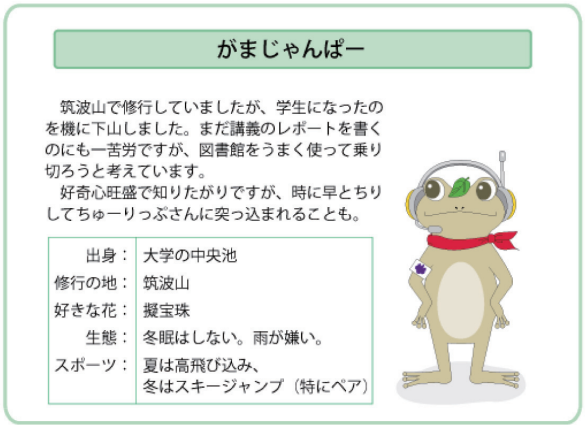


図１　がまじゃんぱーのプロフィール

図２　ちゅーりっぷさんのプロフィール

3．どうして生まれたの？

キャラクターの作成について具体的に動き出し

たのは平成17（2005）年度の後半になってからだが、きっかけは幾つかある。

まず、当時から先行している事例がいくつかあり、それぞれ有効に活用され人気を博していたという事実があった。例えば国立情報学研究所のCAT/ILLのページに登場していたプワンとピヨ太郎[4]、北海道大学の機関リポジトリHUSCAPのはすかっぷちゃん[5]などである。それら先行事例を鑑み、職員の間でもキャラクターが欲しいという話が出ていた。また、当時電子図書館システムの更新を控えており、使い勝手やWebページ、特に附属図書館のトップページが大きく変わることが決まっていたため、インパクトと浸透力のある広報手段が必要とされていた。さらに偶然にも広報関連に使えるお金があったため、キャラクター作成の動きが俄かに具体化することとなった。

4．生みの苦しみ？

これらの状況を受けて、キャラクター作成の有志一同の活動が開始された。特にワーキング・グループといった公式のものを結成したわけではなく、キャラクターに興味のある職員が集まって非公式に形成された、まさに「有志」であった。特に担当を決めず各々が得意分野で自発的に役割を担当する形で、勉強会というよりはむしろ同好会に近い雰囲気のメンバーであった。この有志メンバーでミーティングを行い、最初にキャラクターの使用目的や使用イメージを固めていった。Webページで使いたい、Q&Aで使用したい、グッズも作りたいなどである。その後、その目的・イメージに合わせたコンセプトを作成した。Q&Aで使用するなら2人一組のキャラクターがよい、また2人一組なら人間同士がよいのか、それ以外がよいのか、筑波大学附属図書館に相応しいキャラクターとして、どんな造形がよいのかなど、ブレインストーミングを重ねていった。その結果、2人一組でガマ（カエル）モチーフの男性形とチューリップ（花）モチーフの女性形という基本コンセプトが出来上がった。また偶然にも有志の中に絵心のある人が居て、このコンセプトを実際に図3、図4のようなラフスケッチに描き起こすことができた。これは具体的な設定を詰めるに当たって重宝しただけでなく、後に上層部への説明を行ったり業者にこちらのキャラクターのイメージを伝えたりした時にも非常に役立った。

図3　がまじゃんぱーのラフスケッチ

図4　ちゅーりっぷさんのラフスケッチ

このようにキャラクターの作成そのものは楽しく、また比較的スムーズに運んでいったが、上層部への説明には気を遣った。ただ「キャラクターを作りたい」と言うだけでは許可が出ないと予想されたため、附属図書館全体の広報戦略の一環という位置付けを行うことを考えた。具体的には「ブランディング戦略」と題したプレゼンテーションを作成し、電子図書館システム更新に際して、新電子図書館システムを含めた附属図書館ブ

ランドと広報戦略の再構築が必要であり、附属図書館ブランドと広報の強化の一策として、先行事例を挙げた上でキャラクターが有効である旨を主張した。幸いにして当時の上層部に理解があり、予想よりも容易に作成の許可が下りた。

しかし、その後造形が具体化し最終的な許可を取るに際して、問題が何点か指摘された。特にチューリップモチーフの女性形について、「よく見かけるような造形で権利面には問題がないか」「やや幼く見えるため大学図書館のキャラクターには相応しくないのでは」などの指摘が行われ、ガマモチーフのキャラクターだけでよいのではという話が出てきた。Q&A などで使える２人一組のキャラクターというコンセプトであるため、単独では用途に制約が生じる点を主張し、引き続き２体のキャラクターの必要性を説いた。一方で指摘のあったチューリップモチーフの女性形には眼鏡を追加する等、造形の修正を行い、大学図書館のキャラクターとして違和感を持たれないようにした。また、呼称もそれまで「ちゅーりっぷちゃん」と仮称していたものを「ちゅーりっぷさん」と変更し、当初のコンセプトを維持しつつも上層部の理解も得られるよう調整を図っていった。

なお名称について補足すると、チューリップモチーフの女性形は、学内に比較的浸透していた筑波大学附属図書館の愛称である「Tulips」に由来し「ちゅーりっぷさん（当初は「ちゃん」）」とすることは、早い段階から自然と決まっていた。またガマモチーフの男性形についても、ほぼ同時期に「がまじゃんぱー」という名称が仮決定していた。当時、電子図書館システムの更新が行われていたことは前述したが、ある時、仕様策定委員の教員同士で電子図書館システムについて、片方はシステムの名称（愛称）が重要であるという立場、もう一方は機能が十分であれば名称は重要ではないという立場で深夜にメールで議論が行われた。その議論において、名称が重要であると主張する教員が「名称が重要でないなら、新システムは『がまじゃんぱー』などという名称でも構わないのか」と発言したのだが、あまりにインパクトの強い名前だったため関係者の記憶に残った。そのため、ガマモチーフの男性形キャラクターの名称を考えた際に、誰ともなくこの「がまじゃんぱー」が提案され、仮称を経て採用されるに至った。筑波大学附属図書館の「飛躍」の象徴、機関リポジトリのコンテンツをジャンプして獲得してくる等の意味を後付で考えたが、語呂の良さもあるのか、意外なほど抵抗無く受け入れられた印象がある。

また、命名当時は特に気にしていたわけではなかったので、結果的にではあったが、「職員がカウンターや電話で口にしても恥ずかしくない」程度の名称になっているのではないかと考える。なお、どちらも平仮名表記としたのは、キャラクターとしての「遊び」「柔軟さ」を意識してのことだったが、表記のしにくさ、読みにくさという問題が残った。

５．BC と AD の違いは？

以上のような経緯を経て平成 18（2006）年４月に筑波大学附属図書館にキャラクターが登場したが、その時点では新電子図書館システムの導入直後ということもあり、有志を含め関係者がシステムや Web ページの調整、利用案内の作成などに追われることになり、大々的な登場キャンペーンを打つことはできなかった。しばらくは有志を中心に、館内の掲示物や配布物にワンポイント程度で登場させるに止まった。しかし、やがて職員の間でも認知が高まり「キャラクターを使いたい」という声が聞こえるようになり、キャラクターの使用は有志以外へと広がっていった。

その点でキャラクター登場以前と登場以後（見出しでは、紀元前と紀元後にちなんで「BC（Before Characters）」と「AD（After Dawn）」と表記してみた）を比べると、やはり職員の間で意識の変化が起こったように感じられる。それまでは事務文書の延長という雰囲気が強かった掲示物や配布物から、余白にキャラクターをワンポイントで入れたり、最初からキャラクターを入れることを前提に作ったりするようになる等、利用者の目に留まるもの、見て楽しいものを作ろうという意識が高まっていった。必然的にキャラクター以外

の部分、例えばフォントやレイアウト、色使いなどにも配慮し、デザイン性を強く意識したものが作られるようになっていった（図５）。キャラクターの画像を使いやすい形式に加工して共有フォルダに置いて、職員の誰もが自由に使えるようにしておいたということもあるが、職員が積極的にかつ楽しんでそれらを使ってデザイン面にも配慮した掲示物や配布物を作成するようになった、という事実は興味深い。キャラクターだけが理由とは言えないが、職員の間に広報意識が高まる過程においてキャラクターが大きな役割を果たしたことは確かと言える。

図５　デザイン性を意識した掲示物の例

６．評判はいかに？

キャラクターに限らないが、新しいものを作った時にまず気になるのは、外部の評判である。しかし筑波大学附属図書館のキャラクターに関して、利用者側からの反応は当初は皆無であった。当時、新システムの調整に注力しており、またキャラクターの展開も当初は手作りの掲示物や配布物がメインということもあって、地味な浸透を図るという方法しか採れなかったことに起因する。「このキャラクターは何ですか？」などの何らかの反響があれば、そこから展開をするということも考えられたが、当初は本当にキャラクターを使って作成した掲示物や配布物を、そもそもちゃんと見てくれているのか不安になるくらい無反応であった。

事態が大きく動いたのは、筑波大学図書館情報メディア研究科と附属図書館の研究開発室が共同で作成した「図書館情報リテラシー教本」という情報リテラシーの教科書にキャラクターが採用されたことがきっかけだった（図６）。このリテラシー教本はまず「試作版」が作られたが、その試作版を図書館情報学図書館に配架したところ、とある学生が自身のブログで取り上げ[3]、それがきっかけでキャラクターが広く知られるようになっていった。

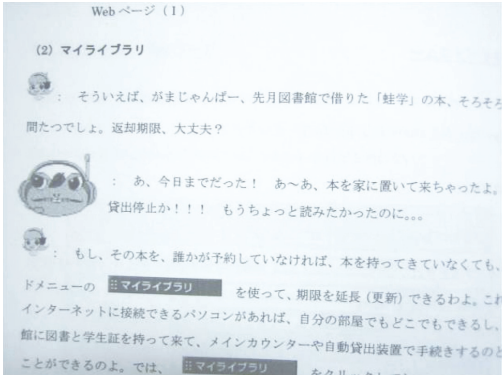


図６　「図書館情報リテラシー教本」での使用例

実はリテラシー教本でのキャラクターの使われ方は、こちらの想定からやや外れた部分もあったのだが、それでも２人一組で掛け合いを行うなど当初のコンセプト通りの使用であり、しかも掛け合いやリテラシー教本そのものの内容の充実度が高かったこともあり、結果として非常に良いプロモーションとなった。またキャラクターを取り上げたブロガーも、その後引き続いてキャラクターを自主的に取り上げてくれており（附属図書館からは依頼などは一切行っていない）、図らずも図書館外に強力なサポーターを持つ形となった。このブロガーが居なければ、筑波大学附属図書館のキャラクターがここまで知名度を得ることは無かったと思われる。

当初に想定した流れではなかったものの、結果

としては非常によい形で学内外へのアピールが行われ、概ね好意的な評価を得て現在に至っている。

7．どんな風に使われているの？

筑波大学附属図書館の Web ページでは、主に以下の箇所で使用されている。

- ●つくばリポジトリ（機関リポジトリ）の FAQ ページ（図７）
- ●「週５図書館生活、どうですか？」およびプロモーションビデオ「週５図書館生活、どうですか？ The Movie」（図８）
- ● Prism（図書館からの役立つ情報ページ／パンフレット）（図９）

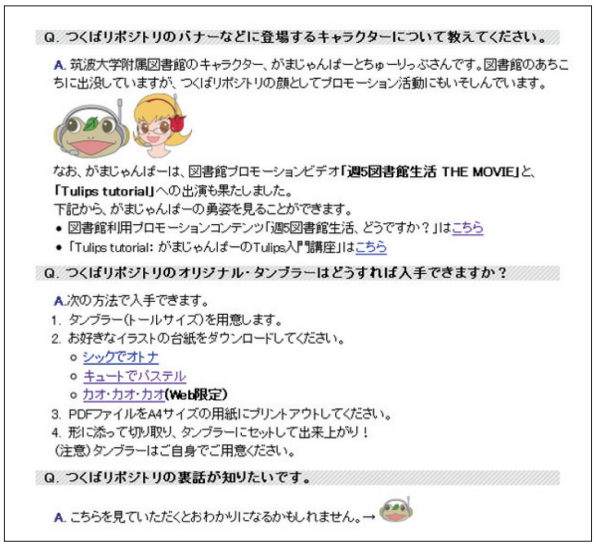


図７　つくばリポジトリの FAQ ページ

図８　「週５図書館生活、どうですか？」の Web ページ

図９　Prism（図書館からの役立つ情報）

その他、筑波大学附属図書館外の「ファン」の手によるブログ記事や Twitter のつぶやき等でも、姿や名前を見かけることもあると思われる。また現時点では特に画像の使用を規制していないこともあり、Twitter のアイコンに筑波大学附属図書館のキャラクター画像が加工の上で使用されている例も散見される。

一方、印刷物としては先述の「図書館情報リテラシー教本」をはじめ各種オリエンテーションでの配布資料等のテキスト類、各種掲示物や配布物等にもワンポイントとしてよく利用されている（図 10）。特に作成意図や用法を全職員に対して詳細に説明したことは無かったが、自然と２人一組の掛け合いといった用法が浸透しており、２人一組というコンセプトが間違っていなかったと思える場面が多く見られる。

また、オープンキャンパスでは高校生に配るうちわ（図 11）や文庫本カバーの図柄として例年がまじゃんぱーの顔を使用しているが、高校生にも非常に人気である。その他、機関リポジトリのプロモーショングッズにも使用され（図 12）、いわゆる「キャラクターグッズ」としての展開も行われている。

最近では、国立情報学研究所の CSI 事業の成果発表などでポスターを作成し、学内外で展示・発表する機会も多いので、そこでもキャラクターを使用することがある（図 13）。内容にもよる

が、キャラクターがいることで人目を惹く効果があるようだ。

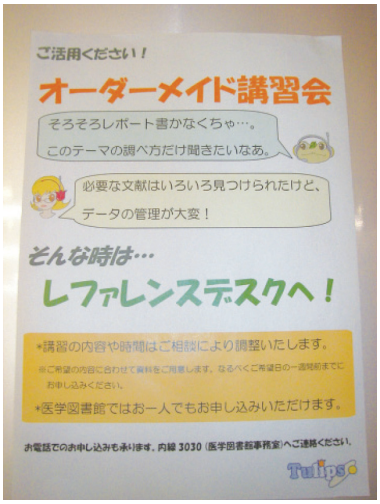


図 10　キャラクターを使用した掲示物の例

図 11　キャラクターグッズの一例（うちわ）

図 12　キャラクターを使用した機関リポジトリのプロモーショングッズ（CD-R）

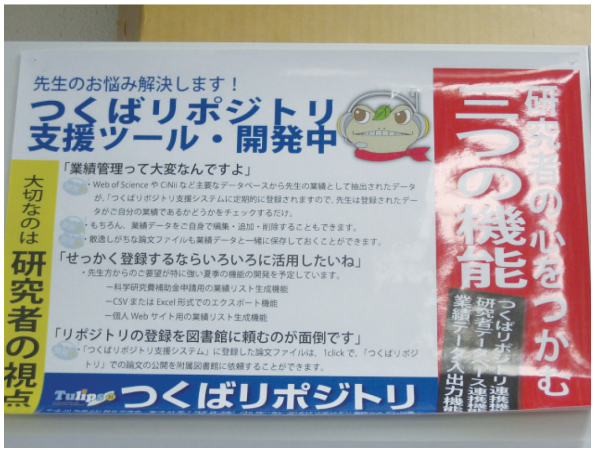


図 13　キャラクターを使用したポスターの例

8．考察

誕生から４年を経過して、掲示物・配布物等にもごく普通に用いられるようになり、また予想外の人気を得るに至り、キャラクターとしては非常に成功したと言える。しかし経緯で述べたように、その誕生は多分に幸運に支えられた部分が大きかった。また知名度を得られるようになったきっかけも、附属図書館の広報によるものではなく、図書館外に強力なサポーターがついたという偶然によるものであった。しかしその幸運と偶然を生かすことができたのは、キャラクター作成の有志をはじめとする附属図書館職員が広報体制に少なからず問題意識を抱き、改善の機会を窺っていた点が大きかったと考える。

また、キャラクター自体も比較的線がはっきりとして、いわゆる「ゆるキャラ」とは若干異なった造形であったことも、広く受け入れられた理由であると考えられる（キャラクター全体として「ゆるキャラ」に該当するかどうかは別の問題となるだろう）。また、がまじゃんぱーの方が比較的人気なのは、一般的な傾向として人間系より動物系のキャラクターの方が好まれることに依ると考えられる。ただし、学生や他大学の図書館関係者などから話を聞く限りでは、決してちゅーりっぷさんに人気が無いということではないようだ。

筑波大学附属図書館のキャラクターが人気になった理由は上記のようなものが推測されるが、あくまで職員から見た印象であり、特に客観的な

証拠があるわけではない。異論も多くあるだろう。今後のキャラクターの安定的な活用を考える上では、学生・教員へのヒアリング・調査などを通じて、なぜここまでがまじゃんぱーとちゅーりっぷさんが受け入れられるようになったかの詳細な分析が必要であると考える。

9．課題と今後の展開など

キャラクターの誕生当初は設定が確定していなかったため使用の際に若干の混乱が生じた。例えば、先述のとおりリテラシー教本で一部想定外の利用があったことなどである。またそれに関連して、明文化された利用ガイドラインの不備が指摘されている。現在のところ、使用するのはほとんど附属図書館の職員に限られているため、目が届きやすく、仮に不適切と思われる利用があっても、比較的早い段階でフォローできると思われる。ただここ最近、附属図書館外で「筑波大学附属図書館のキャラクターを使用したい」という問い合わせが来るようになった。また先述のとおり、Web 上などでは、キャラクターの画像を加工して使用している例も確認されている。

現時点では、問い合わせには個別に対応しており、また幸い問題となる利用は見つかっていない。しかし、仮に問い合わせが頻繁に来るようになったり、問題があると見なされる利用が発見されたりした場合に備えて、ガイドラインの整備を考慮する必要がある。しかし、仮にガイドラインや規則の整備を行う場合には、利用促進と規制の間でバランスを取る必要があり、相当難しい判断が必要になると考える。

また、キャラクターを今後一層活用していく上では、現状の立ち絵と表情のバリエーションだけでは不足しているという問題もある。姿や表情のパターンが限られてしまうため、見飽きてしまう可能性がある。データの元ファイルも納品されているので、必要に応じて自前でバリエーションを作成することは可能だが（すでに数パターンを作成済で、使用されている）、品質ではやや劣ってしまう。

加えて、がまじゃんぱーに比べてちゅーりっぷさんの人気が一見低調のように見えるので、そちらの底上げも今後の課題である。決して人気が無いわけではないようなので、何らかの形でちゅーりっぷさんを活用できるような企画を考えていきたい。

上記のように、キャラクターを使用する上で抱えている問題は少なくないが、それでも筑波大学附属図書館の職員がキャラクターを積極的に活用していく状況は今後とも続いていくと思われる。更に職員による利用だけでなく、学生や教員とのコラボレーション[6]などによって、活用の場や形態を広げていきたいと考えている。様々な場面で作成者も想像しなかった活用が生み出されていく雰囲気を大切にしつつ、より広い活用とそれによる認知度の更なる向上を目指し、最終的には筑波大学附属図書館の知名度を高めていきたい。

また、類似例[7]を見る限りハードルは相当高いと思われるが、大学公認のキャラクターとなる道も模索していくつもりである。さらに、今後海外への訪問や発表の機会も増えると予想されるが、筑波大学附属図書館のプレゼンスを発揮するのに併せてキャラクターの海外進出も図り、双方の世界的な知名度の向上にも努めていきたい。世界中でがまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの姿が筑波大学附属図書館と結びつくようになるのが理想である。

10. おわりに

筑波大学附属図書館におけるキャラクターの存在意義とは、見る人に親しみや楽しさを与える存在であると考える。同時に、職員にとっても使うことの楽しさ、キャラクターを通じた見る人とのコミュニケーションを提供してくれる存在である。筑波大学附属図書館ではまだほとんどできていないが、キャラクターとは、使い方によっては利用者～図書館間の双方向コミュニケーションツールともなり得るものである[8]。

このようなキャラクターとの良好な関係を今後も維持しつつ、新たな展開も模索し、文字通り筑波大学附属図書館の「ブランド」として通用するよう、今後とも永くがまじゃんぱーとちゅーりっ

ぷさんとともに歩んでいきたい。

本稿は、平成 22 年 8 月 26 日に行われた東海地区大学図書館協議会研究集会で発表した内容に、若干の加筆・修正を加えたものである。発表に使用したスライド（PDF ファイル）は、以下の URL に置いた。

http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/~garu/100826.pdf

注・引用文献

1）嶋田晋．特集わが図書館をブランドにするために！：“ちゅーりっぷ”さんと“がまじゃんぱー”はこうして生まれた．大学の図書館．2008,vol.27, no.9, p.174-176.

2）嶋田晋．“がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの生態～筑波大学附属図書館でのキャラクター活用事例～”．つくばリポジトリ．2010-04-27. http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/dspace/handle/2241/105066,（参照 2010-10-12）

3）Min2-fly．“『図書館情報学リテラシー教本：試作版』”．かたつむりは電子図書館の夢を見るか．2007-03-19. http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/20070319/1174303941,（参照 2010-010-12）

4）国立情報学研究所．“chara_prof.jpg”．目録所在情報サービス. http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/common/images/chara_prof.jpg. (参照 2010-10-12)

5）北海道大学附属図書館．“キャラクター紹介”．北海道大学学術成果コレクション：HUSCAP. http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/character_info.html.（参照 2010-10-12）

6）筑波大学 宇陀・松村研究室，筑波大学附属図書館．“近未来書籍カフェ”．近未来書籍カフェ. http://kinmirai.tumblr.com/.（参照 2010-10-12）

筑波大学学園祭「雙峰祭」にて、本学図書館情報メディア研究科の宇陀・松村研究室と附属図書館が共同して行った企画である。がまじゃんぱーの着ぐるみが制作・投入された。なお着ぐるみとの関係は不明だが、来場者の投票による雙峰祭グランプリ（最優秀企画）を獲得した。

7）奈良教育大学．“奈良教育大学 イメージキャラクター取扱要綱”．奈良教育大学. http://www.nara-edu.ac.jp/ADMIN/SECRETARY/nakkyon_rules.pdf.（参照 2010-08-18）

8）呑海沙織．パブリック・リレーションズ戦略の実際　マスコット・キャラクターと選書ツアー．情報管理．2009, vol. 52, no. 6, p.370-374.

参考文献

1）Lifo．“図書館キャラクター”．Lifo-wiki. http://www.lifo-club.org/index.php?%BF%DE%BD%F1%B4%DB%A5%AD%A5%E3%A5%E9%A5%AF%A5%BF%A1%BC.（参照 2010-08-18）

2）kumori．“トキャラ図鑑”. http://kumori.info/data/characters.html.（参照 2010-08-18）

3）餌取直子．特集 図書館を見せる：キャラクターに託したメッセージ ―おかめちゃんを通してお茶大図書館が伝えたいこと―．図書館雑誌．2010, vol.104, no.4, p.210-211.

4）和光大学附属梅根記念図書・情報館．特集図書館を見せる：ロゴ・キャラクターから広がる図書館の試み．図書館雑誌．2010, vol.104, no.4, p.212-213.

事例報告　第64回（2010年度）東海地区大学図書館協議会研究集会（2010.8.26）

利用者と共に造る
―図書館応援企画展『展 FINAL in 図書館』の実践―

大阪芸術大学図書館
多賀谷　津也子

はじめに

本日は、東海地区大学図書館協議会研究集会での発表の機会をいただきまして誠にありがとうございます。本学図書館の取り組みは、「利用者と共に造る」というタイトル通り、利用者である学生たちが図書館を応援しようという自発的な行動によって始まり、図書館と一緒に行ったというところにポイントがあります。そうして、2008年12月に本学図書館で開催しました図書館応援企画展『展 FINAL in 図書館』について、ご報告させていただきます。2009年には、近畿地区で3回の事例報告をさせていただきましたが、その中の一つ「人と情報を結ぶWEプロデュース」から2010年8月『図書館を演出する ── 今、求められるアイデアと実践 ──』を共著で出版させていただきました。宣伝のようで恐縮ですが、自己紹介を兼ねてご紹介をさせていただきます（p.48参照）。現在の図書館があります芸術情報センターが竣工する1981年4月に学校法人塚本学院に就職し、大阪芸術大学図書館に配属されました。その後、1986年に浪速短期大学（現 大阪芸術大学短期大学部）デザイン美術科、広報科の伊丹学舎移転に伴う図書館新設の際に短大図書館に異動になりました。その短大図書館時代の取り組みも著書に書かせていただいていますので、またご高覧いただけましたら幸いです。そして、2003年4月から大阪芸術大学図書館に再度異動になり、現在に至っています。

それでは、まず、大阪芸術大学図書館と「展 −TEN−」という学生ユニットについてご紹介させていただきます。

1．大阪芸術大学図書館と「展−TEN−」について

大阪芸術大学は、芸術学部1学部ですが、その中に15学科あり、大学院と通信教育部があります。学生数は、約6,500人です。学科内容は、造形系として、美術学科・デザイン学科・工芸学科・建築学科・環境デザイン学科・写真学科、メディア系として、映像学科・放送学科・文芸学科・舞台芸術学科・芸術計画学科・キャラクター造形学科があります。また、音楽系として、音楽学科・演奏学科、そして、教育系として、初等芸術教育学科が、2010年4月から新しく加わっています。

図書館は、芸大坂を上がって、図1の写真右手の芸術情報センター内にあります。左手が、事務局（庶務課・学生課・就職課等）や学生食堂もあり、学生バスから降りた学生たちが通って行くメインの通りやロビーもある11号館です。

図1　芸術情報センター２～４階 図書館、B2F 書庫

所蔵数は、図書が約24万5千点、音楽系の学科がありますので、楽譜が約4万9千点、録音資料が約2万6千点、映像学科・放送学科もありま

すので、映像資料が約１万５千点あります。合計約33万７千点ですが、学科の内容に即して、かなり特徴的な資料構成となっています。

2008年当時の本学図書館の状況は、図書館ポータルサイト「マイライブラリ」を2007年４月から学部学生・大学院生・教員に向けて、運用を開始し、2008年４月からは通信教育部生・職員等にも運用開始しましたが、なかなか根付かないこと、そして、若者の本離れのせいか利用者（入館者数・貸出冊数）の減少が気になり、対策を検討中でした。

次に「展 −TEN−」とは、大学院生（芸術制作デザイン領域）を代表として、学生の創作活動の活性化を目的に毎回テーマ・企画内容に合わせて、様々な学科の学生と協力し、見せることにこだわる ユニットです。第１回「展 −TEN−」(2006.06・体育館ギャラリー)。第２回「展２ −TEN TWO−」(2007.07・芸術情報センター展示ホール）就職課とのコラボレーション（就職活動中の４年生が学科を越えてのコラボレーションで作品制作、企業の方々にもアピール)。第３回「展 FACTORY」(2008.09・総合体育館アリーナ他)。その他、「GOODS DESIGN PROJECT」は、入試課とのコラボレーションで、キャンパス見学会で配布のＴシャツやクリアファイル等のグッズデザインを学生から公募、コンペ形式で制作し、展示（図２）も行った上、芸術情報センター１階アートホールでファッションショー（図３）まで開催しました。

図２ 「GOODS DESIGN 2008」11号館１階ロビー

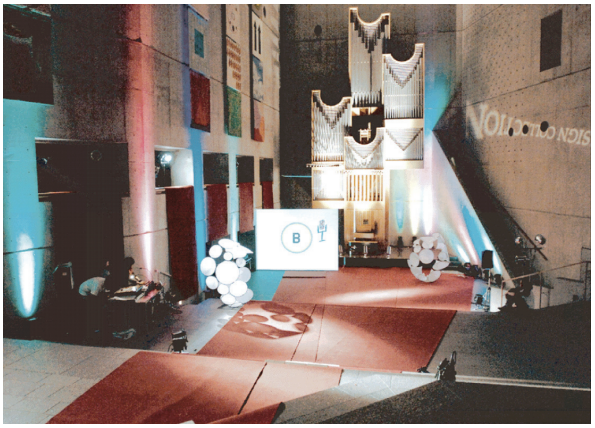


図３ 「芸大生の、芸大生による、みんなのための発表会」

そんな活動を通じて学内では、大きな支持を得ていました。

２．図書館応援企画展『展 FINAL in 図書館』開催までのドキュメント

2008年10月14日（火）に「展 −TEN−」代表の大学院生とグラフィックチーム代表の卒業生（芸術計画学科）との３人で学外の企画の相談で集まりました。しかし、偶然、ワークショップを行う卒業生の作家が参加できなくなり、その日は企画の打ち合わせができなくなってしまいましたので、世間話をするうちに自然と話は図書館のことになり、利用者が減っていることやせっかくの図書館ポータルサイト「マイライブラリ」が浸透しない等の話になりました。そこでそのポスターを制作してもらえないかと依頼したところ「それなら図書館前で月１回不要な箱を提供していますが、図書館まで行かないとわからないので、11号館前の１階ロビーで古書市のようなイベントができないでしょうか。」という提案が出ました。図書館外の場所でのイベントは、私の一存では決められないので、図書館で相談してから返答することになりました。

10月17日（金）には、図書館の連絡会でさっそく了承を得ることができました。その旨を伝えたところ、返信メールがありました。「マイライブラリやその他にも行われている様々な取り組みやサービスは、最終的に利用者が使いやすいように考え出されたものだと思います。しかしながら『図書館は利用してもらってこそ』というのが

一番大切なことのような気がします。なので、例えばマイライブラリなどのサービスも含めて『図書館を使おうキャンペーン』のようなことを軸にすると様々なことが提案できそうです。」そして、その後、図書館で展覧会を開催させてもらえませんかという提案がありました。「今まで図書館に来たことのない人も展覧会を通して図書館に足を運んでくれたら、また図書館の良さにも気付いてくれるのではないでしょうか。」そこで「ライブラリーマネジメントゼミナール2004」の講演『図書館を創る』の中での「図書館も今や人が来るのをただ待っているのではなくて、人を呼び込むという博物館的要素も必要なのではないか」という話を思い出し、図書館の打ち合わせ会でも話し、課員の了承を得て、10月20日（月）図書館での展覧会開催が決定しました。

10月25日（土）には、「展 −TEN−」から5日間という短期間で、展FINAL（テンファイナル）の企画書が提出されました。企画書には次のように書かれていました。

図書館の目的＝図書館利用の促進／利用者の学習、研究、調査、制作活動を支援
展の目的＝芸大活性化（学生の制作活動の活性化）、
今回は在校生と図書館を結ぶパイプ役として展が参加する。通常の図書館利用者の邪魔をするような作品・展示方法はＮＧ。現状の利用者を残したまま、更に展覧会を見に来た人で、図書館の活性化に繋げることを目的とする。

10月31日（金）までにメンバー（作家）と展示フロアを決定しました。

11月10日（月）お昼休みには、「第1回全体会議」として、学生スタッフ・出展作家・図書館の打ち合わせ（顔合わせ）を図書館3階視聴室で行いました。図書館を応援しよう、図書館の活性化に協力しようという趣旨に賛同してくれた学生スタッフ9名と作家（大学院生・助手・副手）12名が集合し、図書館側の挨拶の後、自己紹介を行いました。初対面の方がほとんどでしたが、とても和やかな良い雰囲気の中で幸先の良いスタートを切ることができました。

11月17日（月）には、チラシが完成しました。チラシの印刷代は、今回申請する時間もなかったこともありましたので、インターネット注文の安価なものにしましたが、図書館職員の慶弔費の積立金から捻出しました。プロフィール・作品制作意図提出の他、ポスター印刷も開始し、いよいよ広報開始となりました。

各課との連携
（日頃からのコミュニケーションが大切）

「展 −TEN−」代表やメンバーの一部の卒業が3月に控えていた為に展覧会の開催決定からわずか40日間という、この規模では通常考えられない短期間での開催となってしまいました。よって、時間もない上に予算もない中での開催となってしまいましたので、各課の理解や協力に大変助けられました。日頃から各課との連携やコミュニケーションを大切にしていたことが生かされたと思っています。そして、何よりも「展 −TEN−」のメンバーの今までの経験と頑張りがあったからこそ実現できたことだと実感しています。例えば「体育館倉庫にあるはずの卒業制作展で使用するパネルを借りたい」等、保管場所と物を指定しての依頼なので、庶務課に使用許可願いを提出する際にもスピーディに行えました。

展示場所として、当初、学内の人通りの多い11号館1階ロビーでの展示も考えていましたが、丁度、自治会の展示と重なってしまい、学生課を通しての調整によって、スペースの半分は確保させてもらえるようになりましたが、半分ずつではお互いに効果が薄れるとの判断によって、11号館1階ロビーでの展示は断念しました。その代わりに、11号館1階ロビーの天井にバナーを何枚も吊るし、特大パネルも柱に設置することにし、庶務課にも許可を得ました。（図4）

入試課とシステム管理センターの配慮によって、大阪芸術大学HPのトップページに「展FINAL in 図書館」のバナーを掲載し、「アート」のコーナーからは、チラシのアップとCM映像

図４　11 号館１階ロビー　特大パネル＋天井バナー

（放送学科・音楽学科の学生スタッフ作成）も視聴できるようになりました。

11 月 25 日（火）展示方法が決定するまでには、図書館の平面図のコピーを学生スタッフに渡しましたが、立体図は博物館にしかないので、博物館に依頼しました。図書館は元々展示スペースとして考えられていたわけではないので、展示方法にはかなり苦労しました。学生スタッフのアイデアの下に博物館にも天井の梁の強度や展示方法を何度も相談し、アドバイスをもらいました。試しに事前に吊ってみたりもしました。展示に関する博物館の備品は、大型展示台、照明、延長コード他、あらゆるものを多数借りました。そして、ポスター等の大判印刷は、博物館とシステム管理センターに依頼しました。

チラシの他、展覧会期間中に館内で配布するパンフレットを作成することにしました。そのパンフレットは、館内に展示する作品の解説とその場所にある図書館の施設やサービスを同時に紹介するものです。図書館の解説は、青色の■、作家と作品紹介は赤色の■で表しています。図書館の解説文は、学生スタッフと相談して、学生にもわかりやすい文章を心掛けました。図書館員としては、十進分類法の項目の文言にこだわりがちですが、学生にとっては、「情報科学」や「家政学」等、学科的に馴染みのないことばより、「マーケティング」等の具体的な内容のわかりやすいことばの方が良いと思いました。学生からは、「レファレンス」ということばもわからないので外して欲しいと言われましたが、それは、図書館では一番重要なことばなので、それは絶対に外せないし、むしろ皆に覚えてもらわなければならないことばなのでと話しました。大学図書館に異動して来て、一番欠けていると気にしていたことで、レファレンスカードに記入するなどの試みを始めていましたが、レファレンスがまだまだ浸透していない現実を目の当たりにし、また新たな課題も生まれました。

図５　館内配布パンフレット 上：表・裏表紙＋下：1，2p.

そして、館内で配布するアンケートも学生スタッフと図書館で協働して作成しました。展示に関しては、２項目「展示作品についてのご感想をお聞かせ下さい。」「図書館応援企画内容や展 −TEN−についてご感想をお聞かせ下さい。」図

書館からは、「図書館についてのご感想をお聞かせ下さい。」として、５項目の質問を設定しました。

全て任せるというスタンス（信頼関係）

11 月 29 日（土）は、推薦入試の準備日で午後から休講の為、閉館後の 13：00 ～の搬入となりました。搬入・搬出は、今回の学生スタッフ・作家以外にもたくさんの学生が手伝いに来てくれました。事前に展示方法を検証していましたが、それでも搬入当日、実際に展示するとフックが額の重量に耐えられず、急遽、博物館から展示台を借りたりもしました。（図６）４階の窓を利用して、かなりの重量のある木屑を使用しての絵画３点を展示することになりましたが、天井からの梁にワイヤーで吊るす為、事前に実験済みとはいえ、かなり慎重で時間のかかる作業となりました。窓際の閲覧机とイスも動かしました。

図６　３階視聴覚閲覧室 学習室横に写真作品５点展示『Wormholes』［神尾　康孝］DVD 版も AV ブースで同時放映

当初、図書館の現状は、変えないということでしたが、計算上では、問題ないと思っていたことでも、搬入の段階で微妙な差が生じての変更もいくつかありました。少しどうかと思うこともありましたが、今回は、全て任せるというスタンス（信頼関係）で行いました。任せるということは、もちろんこちらが責任を取るという認識です。

まず、作品と OPAC 端末の位置が近すぎて、作品を観るために人が入るスペースに余裕がないということで、OPAC 端末コーナーの配置を 180 度変更するという大幅な移動を行いました。（図７）

図７　２階閲覧室『remembrance』［明石　隼］

２階閲覧室の閲覧席は、地球にやさしい住空間デザインコンペティションで優秀賞を受賞した『amairo』を展示するために一部撤去しました。『amairo』は、朝顔のような花をイメージしていますが、花びらの部分で雨を集めて、酸性雨の濃度によって根元にある発光ダイオードの色が変わる仕組みになっています。それを全国各地の町並みに置くことによって、色々な町の酸性雨の濃度の違いを知ることができるという提案です。また、待ち合わせの時の雨除けにもなっています。

図８　『雨色 amairo』［佐々木　康宏］

２階から３階の階段吹き抜けに展示した『Internal Flower −solid continuity−』は、上からの自然光と下から当てるライトで浮き立たせるために、上部の電気を消したいとの要望がありましたが、一部だけを消せない仕組みでしたので、消し

たい部分の電球を外しました。

図９　『Internal Flower』［日置　智也］

会期中も４階のカウンター横にパネルを置くことで、時計が圧迫されて遅れているとの連絡がありましたので、どうせ時計はパネルの下で隠れて見えないため、時計の針を外しました。

３．『展 FINAL in 図書館』図書館資料と図書館の空間を活かした展覧会

12 月 1 日（月）師走の幕開けと同時に『展 FINAL in 図書館』は開幕しました。

「図書館応援企画展」は、図書館の施設案内・サービスを紹介するために最も有効な手段として展覧会の開催が企画されましたので、必然的に図書館の資料と空間を活かした展覧会となっています。

まず、図書館入口横の「掲示板」「返却ポスト」「ロッカー」の案内から始まります。

図 10　芸術情報センター２階　図書館入口

中に入ると、いつもの図書館とは別世界のエントランスが広がります。

図 11　図書館２階入口エントランス

図 12　図書と「しおり」を利用したディスプレイ

図書としおりを使ったディスプレイは、まさに図書館ならではの趣向です。図書は大学院生用の４階特別閲覧室に配架している哲学書の全集です。

図 13　図書を利用した作家紹介＋施設紹介（学習室）

作家紹介と施設紹介は、B2F 書庫にある古い年鑑を使用しました。カバーの写真を大判印刷し、解説を本の帯にして、まるで、新しい「本」の誕生です。来館者も本当に作家の本かと思って、めくった形跡が何度も見受けられました。（図 13）

各階には、「大阪芸術大学漫画」を使用しての案内表示を設置しました。「大阪芸術大学漫画」の在庫は、教務課に頼んで体育館倉庫から借り出しました。本と本との間にプリントアウトしたコピー用紙を挟んでいくという低コストのアイデアがここにも生かされていました。

図 14　「大阪芸術大学漫画」を利用した各階案内表示

４階閲覧室の書架の上には、「展 −TEN−」の活動の記録写真がブックエンドを利用したパネル立てに展示されました。

図 15　『展 −TEN− 活動記録写真』［長谷川　朋也］

図書館２階閲覧室では、書架や壁、閲覧机に作品（イラスト）を展示しました。

図 16　『休日』他　［永田　明日香］

らせん階段には、サウンドインスタレーション「トショカン I」が登場しました。最初、図書館内で音を出しても良いスペースはないかと尋ねられて、３階の視聴覚閲覧室の一角なら良いのではないかと話したりもしていましたが、結局、２箇所ある階段の内、アートホールに面した２階から４階まで続くらせん階段での実施となりました。

下記、作家の作品紹介（制作意図）です。

図書館とは膨大な知識の場です。私たちはこの場でその知識を得て、色々な事を知り、考えます。その思考は、時には意識へ、時には現実の行動へと影響を与え、またその両方がさらに影響し合って、私たちを新たな地平へと導いてくれます。この作品は、そんな場所に作られたサウンドインスタレーションです。

2F、3F、4F にスピーカーが配置され、この螺旋階段を移動することで音の表情が変化していきます。この音たちは、意識の世界、現実の世界を表しています。そして、それら２つの世界は隔たりなく地続きで、そこを移動するのは私たち人（思考）です。

［竹下　士敦］

図書館は、2F が入口で、一般書があり、3F は視聴覚資料と楽譜、4F が芸術部門の図書という配置になっています。2F は少し雑音が入り混じるような感じで、段々上の階に上がるにつれ、心地よい崇高な音になっていくイメージでした。まさに、「図書館」を言い表していました。最初、図書館で音を出すのはどうかとも思いましたが、

アンケート結果でもとても評判が良かったので、安心したと同時にとても嬉しく思いました。2F閲覧室のインターネット端末が近くにあるので、確かに会期途中、「音がうるさい。」との苦情もありましたが、協力と了解を求める掲示をしたことで、了承してもらえたかと思っています。

２階入口と４階のらせん階段前には、作品展示のために撤去した閲覧机を利用して、記帳台にしました。来館者の芳名簿、アンケート用紙と回収箱の他、チラシ、パンフレット、フロアマップや会期中のスケジュールを置きました。

また、４階のトイレに向かうまでの壁は、日頃まったく何もない、言わば使われていない忘れられた空間ですが、そこに展のこれまでの軌跡である参加メンバーの写真に続き、「今までかかわった教員や各課の方々からのメッセージ」、また今回参加の「作家たちのプロフィール」や「図書館員の集合写真」が展示されていました。その後に、アンケート記帳台があるという仕掛けです。

図 17 「展 ―TEN―」やメンバーの紹介パネルと記帳台

図書館での展示のメリットは、図書館を利用しながらいつでもどこからでも展示作品を観てもらえることです。通常の美術館等の展示と違って順路というものはありません。多くの利用者の皆さんにパンフレットを片手に迷いながら、本を探しながら作品と触れ合い楽しんでもらえることを願っています。そんな願いを込めて、館長からの下記メッセージもパネルにして展示しました。

図書館は深い深い森に似ている。

森には　さまざまな本という動物たちが棲んでいる。湖もあれば魔法使いも居る。

小鳥たちがさえずり　風がさやさやと渡っている。

樹々には　いろんな果実が実っているが　ときどき毒のリンゴも　ぶら下がっている。

森には　いくつもの小径があり　訪ねる人を迷わせる。さあ　今年もやりました。

展 −TEN− FINAL

おびただしい本たちの木もれ陽の中に見えかくれするアートを訪ねて下さい。

たまには　森の小径で迷子になるのもいいものです。

大阪芸術大学図書館長　岩崎冨士男

4．『展 FINAL in 図書館』で行ったこと

まず、関連イベントとして、初日、12 月 1 日（月）18：10 ～ 19：40 に図書館のある芸術情報センター地下 1 階の喫茶室で「オープニング・レセプション」を行いました。参加者は、『展 FINAL』にかかわった学生スタッフ、出展作家、図書館員の他、学内の教職員、学生だけではなく、学外からの美術関係、図書館関係の参加者も多数ありました。合計 70 名を超えるなごやかで楽しい交流の場となりました。演奏学科卒業生による金管五重奏の演奏もありました。出展作家や学生スタッフの紹介やスピーチなど『展 FINAL in 図書館』に懸けるそれぞれの熱い思いが語られました。

次に、「アーティスト・トーク＆ 図書館ツアー」を隔日の昼休みに 30 分（12：30 ～ 13：00）開催しました。出展作家・図書館員と一緒に作品を見て回りながら、作品解説と図書館の施設やサービスの案内をするという試みです。パンフレットやキャプションには書いていない作家の制作意図や素材・技法なども聞くことができる上に図書館での今まで知らなかった施設や使い方などを知ることができると大変好評を得ることができました。

自分の作品を語ることは、作家として必要なことですが、最初は、「うまくしゃべれません」と不安を口にしていた作家（大学院生）も回数を重ねるうちに堂々と自信を持って語れるようになって行きました。ツアー中、少しうるさいなといぶかしがるような方も中にはおられましたが、読書や作業の手を止めて、ツアーの方にイスの向きを変えて一緒に聞き入っている姿も見られました。

図 18　３階閲覧室　陶作品『OOPARTS』［金　理有］

そして、４階の共同研究室では、「21 人の 21 冊」と題して、出展作家・学生スタッフ 21 人のおすすめ図書が紹介されました。「21 人の 21 冊」は来場者に大変好評でしたが、ただ机の上に並べるだけではなく、机の上に大きな白いボードを置き、その上に本の紹介パネルが置かれていた配置などにもアイデアが光っているとの感想がありました。

図 19　４階の共同研究室「21 人の 21 冊」の展示

また、図書館携帯 OPAC「お知らせ」にトピックス・【展 FINAL】ダイアリー No.1 ～ No.13 を掲載しました。これは、展覧会開催の 13 日間、毎日学生スタッフが執筆し、メール送信されたものを図書館でアップしました。

《【展 FINAL】ダイアリー No.13》

13 日（土）は最後の「アーティスト・トーク＆図書館ツアー」がありました。この日は予定外の作家さんも参加してくださり、とても活気あるツアーになりました。 参加者も大学図書館関係、学生、一般の方など、各方面からたくさんの参加がありました。また、卒業生が教え子の高校生を連れて来てくださっていました。展の会期は終わりましたが、何人かの作家さんの作品をそのまま展示しています。図書館に来られたときは、本と一緒に作品も閲覧してはいかがでしょうか？

今回の企画がきっかけで図書館の利用者が増え、図書館をもっと好きになってもらえたら嬉しいです。『展 FINAL in 図書館』は盛況のうちに終わりました！お越しいただいたみなさん、本当にありがとうございました。（12 月 13 日）

http://lib.osaka-geidai.ac.jp/limedio/i/info-j.html

５．『展 FINAL in 図書館』PR

①チラシ、ポスターを学内各学科・各部署に配布、掲示の他、他大学図書館、ギャラリー等にも送付しました。②大阪芸大のある地元「河南町」という作品の展示がありましたので、河南町に案内をし、初日から河南町長に来場していただきました。その旨を大阪芸大ブログや「大阪芸大グループ通信」にも記載し、河南町役場に掲載誌を届けました。③エレベーター前で偶然、理事長に会いましたので、声を掛けて「展 -TEN-」代表と一緒に案内をしました。（エレベーター・ピッチ）「声を掛けてもらってありがとう」と言ってもらえ、その後の新年会の挨拶（訓示）の中で、感動を目指して仕事をするようにという例にあげてもらえました。④図書館運営委員の教員にも案内を出し、後日、運営委員会でも報告しました。⑤芸大職員へは事務局全体の納会でも報告し、その報告も良かったと就職部長の教員や各課職員からも反響がありました。

6．『展 FINAL in 図書館』の効果

①会期中、入館者数約２千人の増員効果がありました。②『展 FINAL in 図書館』の開催を通して、学生スタッフ・作家・図書館・来場者の皆それぞれが刺激を受け、なおかつ楽しみ、また勉強にもなり、感動を呼び起こしました。そして、皆それぞれが、成長することのできた貴重な場となりました。③学内の学生・教職員、学外の美術関係、図書館界からも大きな反響がありました。④学生スタッフや作家も学科を越えたつながりができて大変喜んでいます。⑤利用者からは、パンフレットの図書館案内もわかりやすく、アーティスト・トーク＆図書館ツアーでも図書館の施設や機能がよくわかったとの感想が多数ありました。⑥図書館は、学生目線の大切さがよくわかりました。学生スタッフからも「一番変わったのは、図書館かもしれない。」との感想があった位です。利用者の感想にも「お気に入りの閲覧席がなくなっていてショックだった。」「来場者がうるさかった。」という声もありましたが、「だけど、それ以上に良かった。」とデメリットを超える反響がありました。

7．その後の展開

図書館では、利用者の声やアンケートに応えて、できることから順々に改革を進めています。①「21 人の 21 冊」を皮切りに「おすすめ図書コーナー」を設置（２階閲覧室）②視聴覚閲覧室利用時間の延長（17：00 → 18：00）③インターネット利用時間の延長（18：00 → 19：00）④各階に「レファレンスコーナー」を設置⑤「図書館案内版」の工夫と設置。⑥常設等作品の展示。学生からの企画があれば歓迎する。⑦図書館サークル（LIBRARY DESIGN LAB.）を結成。⑧館内配布パンフレットの好評を受けて「図書館利用案内」をリニューアル。⑨雑誌の一部（単冊保存雑誌）を貸出可能に。⑩地域住民へ視聴覚資料の視聴を可能に。

まさに『展 FINAL in 図書館』がもたらしたものは計り知れません。学生・教員との連携（つながり）が深まるきっかけとなりました。今後も学生との垣根をなくし、親しみやすい、行ってみたくなる図書館を目指したいと思っています。パンフレットやポスターに学生スタッフの提案で書いた「図書館でできること、もっと、もっと。」を実践して行きたいと思っています。

その後も、図書館内で様々な展示を行っていますが、学生からの企画があれば、歓迎するというスタンスを保ち、今後、より一層の図書館の活性化を目指して、図書館サークル（LIBRARY DESIGN LAB.）を結成しました。そして、さっそく、『展 FINAL』パンフレットの好評から、検討中であった「図書館利用案内」のリニューアルを実現することができました。

図 20　デザイン：近澤優衣　写真：神尾康孝・長谷川朋也

8．教員との連携

４階展示コーナーでは、教員の協力を得て定期的に図書館所蔵品展を開催しています。そして、次の８項目の作業を教員と相談の上に行っています。①開催時期　②テーマ設定　③原稿作成　④配布資料・キャプション等作成　⑤展示　⑥大阪芸大テレビ取材　学生解説（ナレーション）⑦図書館 HP に掲載　⑧芸大ブログに掲載

今まで、図書館運営委員会等で新たな協力を呼び掛けても反応が鈍かったのですが、『展 FINAL』の内外での注目度に加え、教員との連携での図書館所蔵品展が研修会等で他大学の図書館員の方々から評価をいただけていること、そして、図書館 HP 上の「図書館所蔵品展」が、データベースと認められ、国立国会図書館の「Dnavi-国立国会図書館データベース・ナビゲーション・

サービス」に掲載されていることを報告後は、一段と先生方の協力体制を喚起することができました。それは、所蔵品展にとどまらず、図書館での教員による「福本繁樹 ブックアート 和綴じ『さいはひぼん（福本)』鬼本・彦本・姫本・豆本」の展示や工芸学科学生による「ちひさきものはみなうつくし テキスタイル・染織コース Small Works 作品集から」また、イタリアミラノサローネに出品した家具研究会（デザイン学科・建築学科学生）の作品展示「MILANO NI TOUCH」にもつながりました。

http://www.osaka-geidai.ac.jp/library/exhibition/index.html （図書館所蔵品展一覧）

『展 FINAL in 図書館』は、大阪芸大テレビに取材を依頼し、大阪芸大トピックスとして、学内のモニターで繰り返し放送してもらいました。最後にその映像をご覧いただき、少しでも展覧会の雰囲気を感じていただけたらと思っています。

おわりに

研修会で事例報告をさせていただいて、一番嬉しいのは、研修会後に私たちもこんなことをやってみましたとご報告をいただくことです。「大阪芸術大学だからできたこと」と終わってしまうのではなく、何でも良いからやれることからやってみようと思っていただくきっかけになれたらと願っています。昨年の事例報告後も名古屋市立大学さんからは、「さっそく同人誌『カヤバ一揆』の展示を行い、良い反響を得ることができました。」とのご報告をいただきました。本日の報告には含んでいませんでしたが、本学の図書館 PR ポスターの報告を聞いていただいた立命館大学さんからは、「デザインマネジメントを学ぶ学生に正課の課題として、『図書館 PR ポスター』の作成に取り組んでもらいました。」とのご報告をいただきました。

http://www.ritsumei.jp/rs/category/r_na_hito/entry/?param=4/

その他の大学からも色々なご報告をいただき、大変嬉しく思っています。今回、また東海地区大学の皆さまからも嬉しいご報告が届きますことを願っています。どうもありがとうございました。

※本稿は講演を元に、加筆・改稿しました。

大阪芸術大学ブログ 『展 FINAL』関連掲載分

- 2008 年 12 月 1 日 師走のスタートは図書館から
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2008/12/01/
- 2008 年 12 月 2 日「展 −TEN− FINAL in 図書館」二日目。
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2008/12/02/
- 2008 年 12 月 7 日「展 −TEN− FINAL in 図書館」近況報告。
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2008/12/07/
- 2009 年 3 月 3 日　時空を超える想像力、創造力。御時幻影舞台創作展
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2009/03/03/
- 2009 年 4 月 21 日　図書館で身近にアート！
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2009/04/21/
- 2009 年 4 月 22 日　図書館、ウェルカム作戦！
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2009/04/22/
- 2009 年 4 月 23 日　木のぬくもりを届けます Link　齊藤秀樹木彫展
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2009/04/23/
- 2010 年 1 月 18 日　キラめく家具に、出会う。「MILANO NI TOUCH!!」家具研究会作品展より
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2010/01/18/
- 2010 年 2 月 9 日　福を呼ぶ鬼本・豆本、さいはひぼん（福本）福本繁樹 ブックアート 和綴じ「さいはひぼん（福本)」展より
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2010/02/09/
- 2010 年 6 月 16 日　布に懸ける 若きアート魂を見よ
  http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/blog/2010/06/16/

大阪芸術大学図書館ホームページ
http://www.osaka-geidai.ac.jp/library/
図書館 PR ポスター
http://www.osaka-geidai.ac.jp/library/prposter.html

監修：丸本郁子（大阪女学院短期大学名誉教授）
著者：
Ⅰ．ひきつける図書館空間をつくる
尼川ゆら（舞台美術家・大阪芸術大学舞台芸術学科舞台美術コース卒業）
Ⅱ．コラボレーションの力～利用者が参加できる図書館づくり
多賀谷津也子（大阪芸術大学図書館課長）
Ⅲ．集客空間づくりのプロジェクトマネジメン
尼川洋子（人と情報を結ぶＷＥプロデュース代表）
発行：人と情報を結ぶＷＥプロデュース
発売：メディアイランド
ISBN：978-4-904678-26-8

装丁と下記の帯のことば（コピーライト）は、『展 FINAL in 図書館』のグラフィックチーム代表古島佑起（コピーライター・「ことばとデザイン」主宰・大阪芸術大学芸術計画学科卒業）です。

図書館は人（あなた）がつくる。
あなたのちょっとしたアイデアとひと手間かけた図書館が、だれかの居場所になっていたら、それはたぶん素敵なこと。
あなたのつくる図書館に、だれかの居場所はありますか？

行　事

第 64 回（2010 年度）東海地区大学図書館協議会　総会・研究集会

【 総会の部 】

日　　時：平成 22 年 8 月 26 日（木）10：30 ～ 11：50
会　　場：名古屋外国語大学 7 号館 701 教室
総会当番館：名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館
出　席　者：43 大学　67 名

図　書　館　名		職　名
□■　岐阜県　■□		
1	岐阜大学図書館	情報サービス課長
		係員
2	岐阜医療科学大学図書館	司書
		司書
3	岐阜市立女子短期大学附属図書館	嘱託職員
4	岐阜女子大学図書館	図書館 事務課長
5	岐阜保健短期大学図書館	図書館長
6	中部学院大学附属図書館	司書
7	東海学院大学・東海学院大学短期大学部附属図書館	係長
□■　静岡県　■□		
8	静岡大学附属図書館	附属図書館長
		副課長
9	静岡県立大学附属図書館	事務長
10	静岡県立大学短期大学部附属図書館	事務長補佐
11	静岡産業大学図書館	学部図書館グループ長
		司書
12	静岡文化芸術大学図書館・情報センター	図書館・情報センター長
13	東海大学付属図書館 清水図書館	課長
	東海大学付属図書館 沼津図書館	係長
14	浜松医科大学附属図書館	学術情報課長
□■　愛知県　■□		
15	愛知大学図書館	豊橋図書館事務課長
		名古屋図書館事務課長
16	愛知学院大学図書館情報センター	事務長
		業務委託スタッフ
		業務委託マネージャー
	愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター	主任
17	愛知教育大学附属図書館	館長
		情報図書課長
18	愛知県立大学学術情報センター	学術情報部長
19	愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館	学務部長
		芸術情報課 課長補佐

	図　書　館　名	職　名
20	愛知工業大学附属図書館	主査
21	愛知淑徳大学図書館	事務室長
		准教授
22	金城学院大学図書館	課長
23	自然科学研究機構 岡崎情報図書館	係長
24	椙山女学園大学図書館	事務職員
25	大同大学図書館	図書館室長
26	中京大学図書館	係長
		総務係
		豊田図書館副参事
27	東海学園大学図書館	主幹
28	豊田工業大学総合情報センター	事務職員
29	豊橋技術科学大学附属図書館	副課長（図書・情報グループ担当）
30	豊橋創造大学附属図書館	専任職員
31	名古屋大学附属図書館	附属図書館長
		事務部長
		情報管理課長
		情報管理課長補佐
		情報サービス課長補佐
		医学部分館 情報管理掛員
		医学部分館 情報サービス掛員
32	名古屋学院大学学術情報センター	課長補佐
		図書職員
33	名古屋芸術大学附属図書館	東キャンパス図書室長
34	名古屋工業大学附属図書館	学術情報チームリーダー
35	名古屋産業大学・名古屋経営短期大学図書館	主任
36	名古屋女子大学学術情報センター	課長補佐
37	名古屋市立大学総合情報センター	学術情報担当主査
38	南山大学図書館	図書館事務課長
39	日本福祉大学付属図書館	研究・教育連携部 部長
□■　三重県　■□		
40	皇學館大学附属図書館	事務長
41	三重大学附属図書館	学術情報部情報図書館課長
42	三重短期大学附属図書館	図書担当副主幹
□■　当番館　■□		
43	名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館	図書館長
		副館長
		課長
		専門員

総　会　議　事　要　録

Ⅰ　開会

Ⅱ　挨拶

名古屋外国語大学学長　　水谷　　修
東海地区大学図書館協議会長　　松浦　好治

Ⅲ　議長選出

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長
岸　　恭一

Ⅳ　協議事項

1　退会館について

事務局から、愛知新城大谷大学から退会の申請があったとの説明があり承認された。

Ⅴ　報告事項

1　加盟館の館名等の変更について

館名の変更や運営形態の変更があった加盟館の紹介があった。

2　平成21年度事業報告

事務局から平成21年度の事業について次のとおり報告があった。

(1) 第63回（2009年度）総会
平成21年8月6日（木）
会場：名古屋大学文学部237講義室
総会当番館：名古屋大学附属図書館
（47大学・機関68名参加）

1）報告事項
平成20年度事業報告、平成20年度決算報告・同監査報告、講演者等謝金基準の改正について、国公私立の各大学図書館の活動状況、当面の課題等について（名古屋大学、名古屋市立大学、名古屋外国語大学・名古屋学芸大学）

2）協議事項
新規加盟館の承認、退会館について、平成21年度事業計画（案）及び予算（案）について、平成22年度総会当番館について、研修会への加盟館以外の参加について、東海地区図書館協議会の事業について

3）永年勤続者表彰（13名）

(2) 研究集会
平成21年8月6日（木）
テーマ「デジタル・ネイティブと大学図書館」
講演1
「デジタル・ネイティブの情報行動」
立教大学社会学部メディア社会学科准教授
高橋　利枝
講演2
「Google世代の情報の探し方」
名古屋大学附属図書館研究開発室助教
三根　慎二

(3) 研修会

1）第1回「図書館職員基礎研修（第2回）」
平成21年12月3日（木）
会場：同朋学園大学博聞館2階大会議室
研修担当館：同朋学園大学
（31大学・機関50名参加）
講義
「大学図書館職員に求められているもの」
雨森弘行
「資料の収集～目録・分類」
河谷宗徳
「電子情報（電子ジャーナル、データベース等）」　粟野容子
「図書館情報リテラシー教育」　久田睦美
「ILL」　榊原佐知子
「大学図書館と広報」　渡邊敏之

2）第2回「保存修復講演会・講習会」
テーマ：図書資料の保存と修復
会場：名古屋大学
研修担当館：名古屋大学
講演会講師　金山正子
講習会講師　岩田起代子
平成22年2月23日（火）
修復実務講習会A（第1回）、(20名参加。内、公共図書館から2機関2名参加）
修復実務講習会B（第1回）、(20名参加）
平成22年3月5日（金）
修復実務講習会A（第2回）、(21名参加。

内、公共図書館から4機関5名参加）
講演会「紙資料の保存修復」(55名参加。
内、公共図書館から7機関15名参加）
平成22年3月10日（水）
修復実務講習会A（第3回）、(20名参加。
内、公共図書館から2機関2名参加）
修復実務講習会B（第2回）、(20名参加）

(4)「東海地区大学図書館協議会誌」54号
平成21年12月25日（金）発行

(5) 運営委員会等

1）監事会（平成22年度、平成22年6月22日（火）、会場：名古屋大学）
監事館：愛知県立芸術大学、名城大学

3）運営委員会（平成22年度、平成22年7月7日（水）、会場：名古屋大学）

3　平成21年度決算報告・同監査報告

事務局から、平成21年度の決算について報告があり、続いて、監事館を代表して愛知県立芸術大学から、監査の結果、経理は正確に処理されていることを確認したとの報告があった。

平成21年度の決算報告について、報告のとおり承認された。

4　国公私立の各大学図書館の活動状況、当面の課題等について

国公私立の各協議会の理事校・幹事校（名古屋大学、名古屋市立大学、名古屋外国語大学・名古屋学芸大学）から報告があった。

Ⅵ　協議事項

2　会長館・運営館について

事務局から、役員館の選出方法について説明があった後、会長館の選出に移り，立候補がないため、推薦により名古屋大学が選出された。また、機関誌編集委員会を会長館が後日指名する他は、選出母体からの推薦による候補館が承認された。

3　平成22年度事業計画（案）および予算（案）について

事務局から、平成21年度事業計画（案）および予算（案）について説明があり、協議の結果、提案どおり承認された。

4　平成23年度総会当番館について

第65回（平成23年度）総会・研究集会の当番館として名古屋市立大学総合情報センターが選出された。

5　東海地区図書館協議会の事業について

事務局から、東海地区図書館協議会の事業について説明があり、公共図書館との連携・協力事業にご賛同いただき、東海地区図書館協議会への加盟を検討いただきたい、との依頼があった。

Ⅶ　永年勤続者表彰

平成22年度の永年勤続者として11名が表彰された。

村井　千恵（東海学院大学・東海学院大学短期大学部附属図書館）

永年勤続表彰

山田　泰子（東海大学付属図書館沼津図書館）
加島由規子（浜松医科大学附属図書館）
渡邊　英二（中京大学図書館）
武藤やよひ（中京大学図書館）
保富　洋子（豊田工業大学総合情報センター）
次良丸　章（名古屋大学附属図書館）
黒柳　裕子（名古屋大学附属図書館）
夏目弥生子（名古屋大学附属図書館）
堀　　友美（名古屋大学工学研究科・工学部図書室）
中村貴久代（名古屋大学附属図書館）

Ⅷ　閉会

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館課長
守田　正江

【昼休み：図書館見学】

総会当番館である名古屋外国語大学・名古屋学芸大学の図書館およびマルチメディア・ラーニング・センターの見学会が行われた。電子書籍端末の展示会もあわせて開催された。

【研究集会の部】

日　時：平成 22 年 8 月 26 日（木）13:20 ～ 16:00
会　場：名古屋外国語大学 7 号館 701 教室
テーマ：「図書館の演出　～クチコミしたくなる、この図書館に学ぶ～」

事例報告 1
「がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの観察日記」
筑波大学附属図書館　　嶋田　晋

事例報告 2
「利用者と共に造る―図書館応援企画展『展 FINAL in 図書館』の実践―」
大阪芸術大学図書館　　多賀谷　津也子

平成 21 年度決算報告

（平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日）

科　目	予算額 a	決算額 b	過△不足額 b－a	備　考
収入の部	円	円	円	
1．前年度繰越金	1,327,207	1,327,207	0	
2．会　費	445,000	445,000	0	平成 21 年度分： @ 5,000 × 89 館 = 445,000"
3．会誌売上費	464,000	464,000	0	53 号分：@ 2,000 × 4 部 = 8,000 54 号分：@ 2,000 × 228 部 = 456,000
4．雑　収　入	265,000	365,000	100,000	協議会誌 54 号広告掲載料 365,000 @ 30,000 × 2 社 = 60,000 @ 25,000 × 1 社 = 25,000 @ 20,000 × 11 社 =220,000 @ 10,000 × 6 社 = 60,000
5．預金利息	1,426	359	△ 1,067	
計	2,502,633	2,601,566	98,933	

＊前年度繰越金を除く平成 21 年度の収入額　1,274,359 円

科　目	予算額 c	決算額 d	過△不足額 d－c	備　考
支出の部	円	円	円	
1．総会補助金	100,000	100,000	0	第 63 回総会（名古屋大学）
2．研究集会補助金	75,000	73,000	△ 2,000	講演謝金（2 名） （加盟館職員，加盟館外講師）
3．研修会費	180,000	341,000	161,000	講師謝金（9 名），会場館（2 館）
4．源泉所得税納付	18,000	46,882	28,882	平成 21 年度分
5．会誌刊行費	620,000	657,510	37,510	54 号
6．役員会経費	10,000	11,076	1,076	運営委員会ほか役員会
7．事　務　費	50,000	68,670	18,670	封筒（角 2 2,000 枚　長 3 2,000 枚）
8．通　信　費	65,000	57,600	△ 7,400	会誌送付等郵便料金
9．表彰記念費	62,000	63,380	1,380	表彰記念品（ネーム印付きボールペン 13 本，表彰状丸筒，総会写真）
10．予　備　費	1,322,633	0	△ 1,322,633	
11．次年度繰越金	0	1,182,448	1,182,448	
計	2,502,633	2,601,566	98,933	

＊次年度繰越金を除く平成 21 年度の支出額　1,419,118 円

平成 22 年 3 月 31 日締め　預金残高　1,179,373 円
現金残高　3,075 円
資産総額　1,182,448 円

会計監査　平成 22 年 6 月 22 日
愛知県立芸術大学
名城大学

監査済み

平成 22 年度予算

（平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日）

科　目	前年度 決算額 a	本年度 予算額 b	前年度決算額 よりの増△減 b － a	備　考
収入の部	円	円	円	
1．前年度繰越金	1,327,207	1,182,448	△ 144,759	
2．会　費	445,000	440,000	△ 5,000	平成 22 年度分： @ 5,000 × 88 館 = 440,000
3．会誌売上費	464,000	452,000	△ 12,000	55 号分：@ 2,000 × 226 部 = 452,000
4．雑　収　入	365,000	365,000	0	協議会誌広告掲載料　55 号分
5．預金利息	359	359	0	
計	2,601,566	2,439,807	△ 161,759	

＊前年度繰越金を除く本年度の収入額　　1,257,359 円

科　目	前年度 決算額 c	本年度 予算額 d	前年度決算額 よりの増△減 d － c	備　考
支出の部	円	円	円	
1．総会補助金	100,000	100,000	0	第 64 回総会 （名古屋外国語大学・名古屋学芸大学）
2．研究集会補助金	73,000	90,000	17,000	講師謝金（2 名）（加盟館外講師）
3．研修会費	341,000	180,000	△ 161,000	当番館経費（名古屋大学, 静岡県立大学）, 講師謝金等（2 回分）
4．源泉所得税納付	46,882	28,000	△ 18,882	研究集会，研修会での講演料，原稿料に対して
5．会誌刊行費	657,510	660,000	2,490	55 号　300 部
6．役員会経費	11,076	10,000	△ 1,076	運営委員会ほか役員会等
7．事　務　費	68,670	50,000	△ 18,670	封筒等
8．通　信　費	57,600	65,000	7,400	会誌送付等郵便料金
9．表彰記念費	63,380	54,000	△ 9,380	永年勤続表彰者 11 名の記念品（ネーム印付きボールペン）等
10．予　備　費	0	1,202,807	1,202,807	
11．次年度繰越金	1,182,448	0	△ 1,182,448	
計	2,601,566	2,439,807	△ 161,759	

＊予備費を除く本年度の支出額　　1,237,000 円

新図書館紹介

静岡大学附属図書館（静岡館）

〒422-8529　静岡市駿河区大谷836
http://www.lib.shizuoka.ac.jp/

静岡大学附属図書館（静岡館）は、昭和43年キャンパス移転に伴い、現在の場所に５階建4,535 m^2 の建物が建設されました。昭和53年には７階建3,061 m^2 を増築、その後も書庫の増築や耐震工事が行われましたが、老朽化、狭隘化が進み、最近では入館者数も減少傾向にありました。そこでもっと楽しく、魅力ある図書館にしようと改修工事に着手し、平成22年４月リニューアルオープンしました。

基本コンセプトは「Learning Park」。「Learning」は、学習・研究する場としての図書館、「Park」は人が行き交う都市の中の公園をイメージしています。

正面玄関を入ると、キャンパスキャラクター「しずっぴー」が出迎えます。その右手がくつろぎの場として飲食可能なラウンジです。朝食をとりながら開館を待つ学生さんの姿も見られます。左手にあるのはギャラリーです。44 m^2 のこの小部屋は元館長室でしたが、入口に続く壁を取り払って、学生や教職員の研究や作品の発表の場としました。学内にいてもなかなか交流する機会のない教職員や学生が、研究や創作活動などを通して交流する場となるように、展示期間中にギャラリートークも開催しています。

閲覧室への入り口には、自動入退館装置を設置しました。学生証、教職員証で利用者の認証をします。災害時の対応策の一つとして退館時にも認証し、館内の滞在者を把握できるようにしました。

ゲートを入ると、サービスカウンタがある４階メインフロアです。主に参考図書を配架しています。そのほかPCワークエリア、国際交流、視聴覚、新聞エリアがあります。

３階は雑誌閲覧室です。ゆったりと過ごせるようにソファも用意しました。また、個人ブース６室も新たに設けました。

５階は、一般開架閲覧室とハーベストルーム。キャレルデスク200席を並べた開架閲覧室は静かに学習したい利用者のためのゾーンです。グループで話をしながら学習を進めたい利用者のためには、ハーベストルームと名づけた244 m^2 のオープンスペースを用意しました。ファミレス型のブース、可動式の机・椅子、少し高級なソファと、目的や気分に合わせて自由に選ぶことができます。また、このスペースでは、教員によるゼミやセミナーも行われています。

６階にはグループ学習室が３室。可動式の間仕切りをはずせば、最大48名で利用できるセミナー室となります。シンクライアント、プロジェクタなどの機器を備えています。

改修後の図書館の施設・設備は、教職員や学生のモチベーションを高めているようです。今後も利用者とともに「新しい静岡大学の文化」を作っていきたいと思っています。

ギャラリー

しずっぴー

ハーベストルーム

新図書館紹介

中京大学名古屋図書館付属新棟

〒466-8666　名古屋市昭和区八事本町101-2
http://www.chukyo-u.ac.jp/tosho/index.html

中京大学名古屋キャンパスに、平成22年９月名古屋図書館付属新棟がオープンした。これは、名古屋図書館の建て替えの第Ⅰ期工事であり、その後第Ⅱ期工事として旧図書館が解体され、その跡地に教育研究複合棟が建設される。

2012年12月完成予定のこの新棟の１階、２階部分が図書館となり、第Ⅰ期工事ですでに完成している付属新棟とが連結され、新図書館として完成することになる。

旧図書館は、本学が商学部、体育学部の２学部時代からの図書も所蔵されており、建物自体は1966年に文学部、法学部が新設され、４学部となり、大幅に蔵書が増えたことから1969年に建設された。しかしその図書館もできてから41年目を向かえ、老朽化と共に更なる蔵書の増加により、ここで役目を終えることになった。旧図書館からこの夏休みを利用し、約52万冊の図書をはじめ、事務室も含めた図書館機能の全てを付属新棟に移転させた。

新設された付属新棟には自動書庫（80万冊収蔵可能）や積層式書庫（９万冊）貴重本書庫、事務室、館長室、会議室、グループ学習室、コンピュータ室等が設置されている。自動書庫は、名古屋キャンパス内の各研究室をはじめ、学内ＬＡＮに接続されている全てのパソコン端末からでも本の取り出し指示が可能で、指示を出してから２分程度で閲覧カウンターの出納ステーション取り出し口へ出てくる。この自動書庫は関東、関西をはじめ、現在全国の１７大学で導入されているが、東海地区の大学では本学が始めての導入となる。

一方第Ⅱ期工事で2012年12月に完成予定の教育研究複合棟には、閲覧カウンターをはじめ、開架図書13万冊およびＩＴコーナー、検索コーナーのほか、グループ学習室や自由に会話や飲食が可能な「コモンスペース」も予定されている。また、閲覧席は個別のブースも含め、459席が用意されることになる。

図書館付属新棟

名古屋図書館自動書庫

東海地区大学図書館協議会会則

（名　称）

第 1 条　本会は、東海地区大学図書館協議会と称する。

（目　的）

第 2 条　本会は、東海地区大学図書館の発展を図ると共に、図書館員の教養と技術の向上及び相互の親睦をはかることを目的とする。

（会　員）

第 3 条　本会は、前条の目的に賛同する東海地区（静岡、愛知、岐阜、三重）の国立、公立、私立の大学図書館その他これに準ずる図書館を以て組織する。

（事　業）

第 4 条　本会は、第 2 条の目的を達するために、次の事業を行う。

一　会員相互間の連絡提携

二　図書及び図書館に関する研究会、講習会、展覧会等の開催並びに後援

三　図書館運営に関する相談、指導

四　機関誌の発行

五　その他必要と認める事業

（会　長）

第 5 条　本会に会長を置く。

2　総会において会長館を選出し、その会長館の図書館長が会長となる。

3　会長の任期は、2 年とする。但し、重任を妨げない。

（委員会）

第 6 条　本会に運営委員会及び機関誌編集委員会を置く。

2　委員会に関する事項は、別に定める。

（総　会）

第 7 条　会長は、毎年一回総会を招集する。

2　会場は、加盟館の輪番とする。

第 8 条　会長館は、協議事項（議題及び承合事項）をとりまとめ、審議運行の手続きを計る。

第 9 条　総会の票決権は、一館一票とし議決は出席館の過半数の賛成を要する。

（会　計）

第 10 条　本会の経費は、会費その他の収入をもって当てる。

2　会員の会費は、年額 5,000 円とする。

第 11 条　本会の会計事務を監査するため、監事を置く。

2　総会において監事館を選出し、その監事館の図書館長が監事となる。

3　監事の任期は 2 年とする。但し、重任を妨げない。

第 12 条　本会の予算は、毎年総会の議決を経て決定し、決算は監査を受けたのち、次の総会において承認を得るものとする。

第 13 条　本会の会計年度は、4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終る。

（事務局）

第 14 条　会長館に、本会の事務局を置く。

2　事務局に、事務局長及び職員を置く。

3　会長館の事務部長、又はこれに準ずる者が事務局長となる。

（会則の変更）

第 15 条　この会則の変更は、総会の承認を得なければならない。

（附　則）

本会則は、昭和 25 年 5 月 1 日から施行する。

（附　則）

この改正は、昭和 50 年 7 月 23 日より施行する。

東海地区大学図書館協議会
運営委員会規程

第１条　運営委員会は、本会の運営に関する事項を審議する。

第２条　運営委員会の構成は、国立大３、公立大３、私立大４、（短大１を含む）とする。

第３条　運営委員は、総会において選出する。

２　運営委員の任期は２年とする。ただし、再任を妨げない。

３　前項の任期が満了しても、後任者が就任するまでは、なお、その任にあるものとする。

第４条　運営委員会に、委員長をおく。

２　運営委員長は、会長がこれに当たる。

３　運営委員長は、必要に応じ委員会を招集することができる。

第５条　運営委員会に、必要に応じて小委員会を置くことができる。

第６条　運営委員会の事務は、事務局内において行う。

附　則

この改正は平成 12 年７月 19 日から施行する。

東海地区大学図書館協議会
機関誌編集委員会規程

1　機関誌の発行について、編集委員会を設ける。

2　編集委員は、会長の指名による。

3　編集委員会に、委員長を置く。

4　編集委員長は、会長がこれにあたる。

5　編集委員長は、必要に応じ委員会を招集することができる。

6　編集委員会の事務は、事務局内において行う。

東海地区大学図書館協議会
研修企画小委員会内規

平成 12 年 10 月６日
運営委員会

（目的）

第１　この内規は、東海地区大学図書館協議会（以下「協議会」という。）の研修に関し、必要な事項を審議するため、運営委員会の下に研修企画小委員会（以下「小委員会」という。）を置き、必要な事項を定めることを目的とする。

（審議事項）

第２　小委員会は、次に掲げる事項を行う。

一　協議会が行う研修の企画に関すること

二　その他研修に関し、必要な事項

（小委員会の構成）

第３　小委員会は、次に掲げる委員館をもって構成する。

一　協議会会長館

二　国立、公立、私立の運営委員館から各１館

三　研修会会場館

２　小委員会に委員長館を置き、小委員会の互選による。

（小委員会の庶務）

第４　小委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。

附　則

この内規は、平成 12 年 10 月６日から施行する。

東海地区大学図書館協議会
ホームページ小委員会内規

平成 12 年 10 月６日
運営委員会

（目的）

第１　この内規は、東海地区大学図書館協議会（以下「協議会」という。）のホームページ（以下「ホームページ」という。）に関し、必要な事項を審議するため、運営委員会の下にホームページ小委員会（以下「小委員会」という。）を置き、必要な事項を定めることを目的とする。

（審議事項等）

第２　小委員会は、次に掲げる事項を行う。

一　ホームページの運用・管理に関すること。

二　ホームページの企画・編集に関すること。

三　その他ホームページに関し、必要な事項。

（小委員会の構成）

第３　小委員会は次に掲げる委員館をもって構成する。

一　協議会会長館
二　国立、公立、私立の運営委員館から各１館
２　小委員会に委員長館を置き、小委員会の互選による。
（小委員会の庶務）
第４　小委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。
附　則
この内規は、平成 12 年 10 月 6 日から施行する。

東海地区大学図書館協議会ホームページによる情報発信に関わる申し合わせ

平成 12 年 10 月 6 日
運営委員会

１　情報発信の範囲
ホームページを通じて発信する情報は、次の各号に該当するものとする。
①協議会事業に関する情報
②協議会加盟館に関する情報
③その他ホームページ小委員会（以下「小委員会」という。）が必要と認めた情報
２　情報発信できる者の範囲
ホームページを通じて情報発信できる者は協議会加盟館とする。
３　情報発信の手続き
①ホームページを通じて情報発信しようとする者は、協議会事務局宛に HTML 形式の文書をメールで送付するものとする。
②加盟館から送付された文書の内容は原則として変更しない。
③ホームページに掲載する文書の登録及び削除の決定は、小委員会が行う。但し、疑義があるときは、小委員会は運営委員会委員長と協議する。
④ホームページを通じて情報公開している者で、公開する情報の変更又は停止等の事由が生じた時は、速やかに協議会事務局に連絡する。
⑤小委員会は公開されたホームページの情報が不適当と判断した場合は、そのファイルを削除し、リンクを切断することができるものとする。
４　ホームページ
当分の間、ホームページは名古屋大学附属図書館内のサーバーに置く。

表彰規程

第１条　東海地区大学図書館協議会会則第４条第５号に基づき加盟館の職員に対して行う表彰はこの規程の定めるところによる。
第２条　毎年総会の前日までに通算 20 年図書館に在職する者。
第３条　この規程による表彰は加盟館長の推薦により総会において行う。
第４条　表彰者には記念品及び感謝状を贈呈する。
第５条　この規程の改正は総会の議決によって行う。
附　則
この規程は、昭和 44 年 10 月 29 日から実施する。

表彰者推薦に関する申合せ

（昭和 53 年 9 月 4 日）

東海地区大学図書館協議会の加盟館に在職する者のうち、つぎの各項のいずれかに該当する者を推薦することとする。
⑴　毎年総会の前日までに通算 20 年以上加盟館に在職する者。
⑵　毎年総会の前日までに通算 25 年以上図書館に在職し、かつ３年以上加盟館に在職する者。
なお、⑴、⑵のいずれについても事務補佐員としての在職期間も加算するものとする。

東海地区大学図書館協議会　総会当番館一覧

回	年 月	大　学　名	県別
1	昭和 25.6	名古屋大学	愛知
2	26.6	金城学院大学	〃
3	26.11	三重大学	三重
4	27.5	愛知学芸大学	愛知
5	27.10	名古屋工業大学	〃
6	28.5	三重県立大学	三重
7	28.8	名古屋市立大学	愛知
8	29.10	静岡大学	静岡
9	30.9	岐阜大学	岐阜
10	31.5	愛知大学	愛知
11	32.10	日本大学（三島）	静岡
12	33.6	名城大学	愛知
13	34.9	岐阜薬科大学	岐阜
14	35.11	名古屋大学	愛知
15	36.11	南山大学	〃
16	37.6	岐阜県立医科大学	岐阜
17	38.6	名古屋工業大学	愛知
18	39.10	愛知県立大学	〃
19	40.10	日本福祉大学	〃
20	41.10	中京大学	〃
21	42.11	岐阜薬科大学	岐阜
22	43.11	愛知学院大学	愛知
23	44.10	三重大学	三重
24	45.9	同朋大学	愛知
25	46.10	名古屋市立大学	〃
26	47.10	中部工業大学	〃
27	48.10	愛知教育大学	〃
28	49.10	大同工業大学	〃
29	50.7	愛知県立芸術大学	〃
30	51.6	市邨学園女子短期大学	〃
31	52.6	静岡大学	静岡
32	53.9	愛知工業大学	愛知
33	54.9	静岡女子大学	静岡
34	55.9	名古屋学院大学	愛知

回	年 月	大　学　名	県別
35	56.10	浜松医科大学	静岡
36	57.9	名古屋女子大学	愛知
37	58.10	静岡薬科大学	静岡
38	59.9	南山大学	愛知
39	60.10	豊橋技術科学大学	〃
40	61.6	中京大学	〃
41	62.6	愛知県立大学	〃
42	63.6	愛知学院大学	〃
43	平成 元.6	愛知教育大学	〃
44	2.6	愛知大学	〃
45	3.7	静岡県立大学	静岡
46	4.6	中部大学	愛知
47	5.6	岐阜大学	岐阜
48	6.7	名古屋学院大学	愛知
49	7.6	岐阜薬科大学	岐阜
50	8.7	愛知大学	愛知
51	9.7	浜松医科大学	静岡
52	10.7	日本福祉大学	愛知
53	11.7	愛知県立看護大学	〃
54	12.7	愛知工業大学	〃
55	13.7	三重大学	三重
56	14.7	金城学院大学	愛知
57	15.6	岐阜県立看護大学	岐阜
58	16.7	南山大学	愛知
59	17.7	名古屋工業大学	〃
60	18.7	名城大学	〃
61	19.8	愛知県立芸術大学	〃
62	20.8	愛知淑徳大学	〃
63	21.8	名古屋大学	〃
64	22.8	名古屋外国語大学・名古屋学芸大学	〃
65	23 予定	名古屋市立大学	〃
66	24 予定	中京大学	〃
67	25 予定	静岡大学	静岡
68	26 予定	中部大学	愛知

東海地区大学図書館協議会加盟館一覧

平成 22 年 12 月 1 日現在

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX
	(88)					
□■　岐阜県　■□	(14)					
朝日大学図書館	学校法人 朝日大学	森下　伊三男	〒501-0296	瑞穂市穂積 1851-1	(058)329-1051	(058)329-0021
岐阜大学図書館	国立大学法人	小見山　章	〒501-1193	岐阜市柳戸 1-1	(058)293-2184	(058)293-2194
岐阜医療科学大学 図書館	学校法人 神野学園	阿部　順子	〒501-3892	関市市平賀字長峰 795-1	(0575)22-9401	(0575)46-9570
岐阜経済大学図書館	学校法人 岐阜経済大学	新家　茂	〒503-8550	大垣市北方町 5-50	(0584)77-3527	(0584)77-3528
岐阜県立看護大学 図書館	(岐阜県)	会田　敬志	〒501-6295	羽島市江吉良町 3047-1	(058)397-2304	(058)397-2304
岐阜市立女子短期大学 附属図書館	(岐阜市)	瀬尾　幸市	〒501-0192	岐阜市一日市場北町 7-1	(058)296-3123	(058)296-3130
岐阜聖徳学園大学 図書館	学校法人 聖徳学園	宮川　典之	〒501-6194	岐阜市柳津町高桑西 1-1	(058)279-6416	(058)279-1242
岐阜女子大学図書館	学校法人 杉山女子学園	下野　洋	〒501-2592	岐阜市太郎丸 80	(058)229-2212 (422)	(058)229-2222
岐阜保健短期大学 図書館	学校法人 豊田学園	熊崎　百代	〒500-8281	岐阜市東鶉 2-92	(058)274-5001	(058)274-5260
岐阜薬科大学附属 図書館	(岐阜市)	宇野　文二	〒502-8585	岐阜市三田洞東 5 丁目 6-1	(058)237-3931	(058)237-3631
情報科学芸術大学院 大学附属図書館	(岐阜県)	安藤　泰彦	〒503-0014	大垣市領家町 3-95	(0584)75-6803	(0584)75-6803
中京学院大学総合 メディアセンター	学校法人 安達学園	朝岡　敏行	〒509-9195	中津川市千旦林 1-104	(0573)66-3121 (代表)	(0573)62-0325
中部学院大学附属 図書館	学校法人 岐阜済美学院	吉川　武彦	〒501-3993	関市桐ヶ丘 2 丁目 1 番地	(0575)24-2243	(0575)24-2434
東海学院大学・東海学 院大学短期大学部附属 図書館	学校法人 神谷学園	神谷　和孝	〒504-8511	各務原市那加桐野町 5	(058)389-2969	(058)371-9851

□■　静岡県　■□	(14)					
静岡大学附属図書館	国立大学法人	加藤　憲二	〒422-8529	静岡市駿河区大谷 836	(054)238-4474	(054)238-5408
静岡県立大学附属 図書館	静岡県公立 大学法人	稲田　晴年	〒422-8526	静岡市駿河区谷田 52-1	(054)264-5801	(054)264-5899
静岡県立大学短期大学 部附属図書館	静岡県公立 大学法人	原田　茂治	〒422-8021	静岡市駿河区小鹿 2-2-1	(054)202-2617	(054)202-2620
静岡産業大学図書館	学校法人 第二静岡学園	岩崎　功	〒438-0043	磐田市大原 1572-1	(0538)36-8844	(0538)36-3580
静岡文化芸術大学 図書館・情報センター	公立大学法人 静岡文化芸術大学	藤田　憲一	〒430-8533	浜松市中区中央二丁目 1 番 1 号	(053)457-6124	(053)457-6125
静岡理工科大学附属 図書館	学校法人 静岡理工科大学	住谷　實	〒437-8555	袋井市豊沢 2200-2	(0538)45-0231	(0538)45-0230
聖隷クリストファー 大学図書館	学校法人 聖隷学園	平野　美津子	〒433-8558	浜松市北区三方原町 3453	(053)439-1416	(053)414-1146
東海大学付属図書館 清水図書館	学校法人 東海大学	川崎　一平	〒424-8610	静岡市清水区折戸 3-20-1	(054)334-0414	(054)334-0862

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX
東海大学付属図書館 沼津図書館	学校法人 東海大学	野須　潔	〒410-0395	沼津市西野 317	(055)968-1114	(055)968-1153
東海大学短期大学部 図書館	学校法人 東海大学	坂本　雅子	〒420-8511	静岡市葵区宮前町 101	(054)261-9527	(054)261-6865
常葉学園大学附属 図書館	学校法人 常葉学園	天野　忍	〒420-0911	静岡市葵区瀬名 1-22-1	(054)261-4499	(054)263-1164
日本大学国際関係学部 図書館	学校法人 日本大学	田中　徳一	〒411-8555	三島市文教町 2 丁目 31-145	(055)980-0806	(055)988-7875
浜松大学附属図書館	学校法人 常葉学園	川上　朋男	〒431-2102	浜松市北区都田町 1230 番地	(053)428-3613	(053)428-3901
浜松医科大学附属 図書館	国立大学法人	中原大一郎	〒431-3192	浜松市東区半田山一丁目 20-1	(053)435-2169	(053)435-5140

□■　愛知県　■□　(50)

愛知大学図書館	学校法人 愛知大学	荒川　清秀	〒441-8522	豊橋市町畑町 1-1	(0532)47-4181	(0532)47-4182
愛知医科大学医学 情報センター（図書館）	学校法人 愛知医科大学	菅屋　潤壹	〒480-1195	愛知郡長久手町大字岩作字雁又 21	(0561)62-3311	(0561)62-3348
愛知学院大学図書館 情報センター	学校法人 愛知学院	寳多　國弘	〒470-0195	日進市岩崎町阿良池 12	(0561)73-1111 （代表）	(0561)73-7810
愛知学泉大学図書館	学校法人 安城学園	武藤　宣道	〒471-8532	豊田市大池町汐取 1	(0565)35-7097	(0565)35-1003
愛知教育大学附属 図書館	国立大学法人	折出　健二	〒448-8542	刈谷市井ヶ谷町広沢 1	(0566)26-2683	(0566)26-2680
愛知県立大学学術 情報センター図書館	愛知県公立 大学法人	宮崎　真素美	〒480-1198	愛知郡長久手町大字熊張字茨ケ廻間 1522-3	(0561)64-1111 （代表）	(0561)64-1104
愛知県立芸術大学芸術 情報センター図書館	愛知県公立 大学法人	寺井　尚行	〒480-1194	愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峯 1-114	(0561)62-1180 （代表）	(0561)62-0244
愛知工科大学附属 図書館	学校法人 電波学園	畑中　義式	〒443-0047	蒲郡市西迫町馬乗 50-2	(0533)68-1135	(0533)68-0352
愛知工業大学附属 図書館	学校法人 名古屋電気学園	井　研治	〒470-0392	豊田市八草町八千草 1247	(0565)48-8121	(0565)48-2908
愛知産業大学・短期 大学図書館	学校法人 愛知産業大学	須賀　周平	〒444-0005	岡崎市岡町字原山 12-5	(0564)48-4591	(0564)48-5113
愛知淑徳大学図書館	学校法人 愛知淑徳学園	久保　朝孝	〒480-1197	愛知郡長久手町長湫片平 9	(0561)62-4111 （代表）	(0561)64-0310
愛知東邦大学図書館	学校法人 東邦学園	浅生　卯一	〒465-8515	名古屋市名東区平和ケ丘 3-11	(052)782-1243	(052)781-0931
愛知文教大学附属 図書館	学校法人 足立学園	黒田　彰子	〒485-8565	小牧市大字大草字年上坂 5969-3	(0568)78-2211	(0568)78-2240
愛知みずほ大学附属 図書館	学校法人 瀬木学園	加藤　象二郎	〒470-0394	豊田市平戸橋町波岩 86-1	(0565)43-0116	(0565)46-5220
桜花学園大学・ 名古屋短期大学図書館	学校法人 桜花学園	小川　雄二	〒470-1193	豊明市栄町武侍 48	(0562)97-1725	(0562)97-1703
桜花学園大学桜堂記念 図書館	学校法人 桜花学園	森本　司	〒471-0057	豊田市太平町七曲 12-1	(0565)36-4432	(0565)36-4433
金城学院大学図書館	学校法人 金城学院	柴田　道子	〒463-8521	名古屋市守山区大森 2-1723	(052)798-0180	(052)768-1066
至学館大学附属図書館	学校法人 至学館	松岡　孝博	〒474-8651	大府市横根町名高山 55	(0562)46-1239	(0562)46-3860
自然科学研究機構 岡崎情報図書館	大学共同利用 機関法人	大峯　巌	〒444-8585	岡崎市明大寺町西郷中 38	(0564)55-7191	(0564)55-7199
修文大学附属図書館	学校法人 一宮女学園	池野　武行	〒491-0938	一宮市日光町 6 番地	(0586)45-5550 （代表）	(0586)45-1600
椙山女学園大学図書館	学校法人 椙山女学園	澤田　善次郎	〒464-8662	名古屋市千種区星が丘元町 17-3	(052)781-6452	(052)781-3094

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX
星城大学図書館	学校法人 名古屋石田学園	武田　洋平	〒476-8588	東海市富貴ノ台 2-172	(052)601-6000 (代表)	(052)601-6010
大同大学図書館	学校法人 大同学園	服部　文彦	〒457-8530	名古屋市南区滝春町 10-3	(052)612-6873	(052)612-6108
中京大学図書館	学校法人 梅村学園	棚橋　純一	〒466-8666	名古屋市昭和区八事本町 101-2	(052)835-7157	(052)835-1249
中部大学附属 三浦記念図書館	学校法人 中部大学	鶴田　正道	〒487-8501	春日井市松本町 1200	(0568)51-1111 (代表)	(0568)52-1510
同朋学園大学部附属 図書館	学校法人 同朋学園	栗原　幸江	〒453-8540	名古屋市中村区稲葉地町 7-1	(052)411-1951	(052)411-1120
東海学園大学図書館	学校法人 東海学園	津田　早苗	〒468-8514	名古屋市天白区中平2丁目 901	(052)801-1528	(052)804-1192
豊田工業大学 総合情報センター	学校法人 トヨタ学園	山口　眞史	〒468-8511	名古屋市天白区久方 2-12-1	(052)809-1743	(052)809-1744
豊田工業高等専門学校 図書館	独立行政法人 国立高等専門 学校機構	長岡　美晴	〒471-8525	豊田市栄生町 2-1	(0565)36-5904	(0565)36-5920
豊橋技術科学大学附属 図書館	国立大学法人	角田　範義	〒441-8580	豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘 1-1	(0532)44-6562	(0532)44-6566
豊橋創造大学附属 図書館	学校法人 藤ノ花学園	青嶋　由美子	〒440-8511	豊橋市牛川町松下 20-1	(050)2017-2105	(050)2017-2115
名古屋大学附属図書館	国立大学法人	松浦　好治	〒464-8601	名古屋市千種区不老町	(052)789-3666	(052)789-3693
名古屋外国語大学・ 名古屋学芸大学図書館	学校法人 中西学園	岸　恭一	〒470-0188	日進市岩崎町竹ノ山 57	(0561)75-1726	(0561)75-1727
名古屋学院大学 学術情報センター	学校法人 名古屋学院大学	小出　博之	〒456-8612	名古屋市熱田区熱田西町 1-25	(052)678-4092	(052)682-6826
名古屋経済大学・ 名古屋経済大学短期大 学部図書館	学校法人 市邨学園	新美　治一	〒484-0000	犬山市字樋池 61-22	(0568)67-3798	(0568) 67-9321
名古屋芸術大学附属 図書館	学校法人 名古屋自由学院	星　順治	〒481-8503	北名古屋市熊之庄古井 281	(0568)24-0315 (代表)	(0568)26-3122
名古屋工業大学附属 図書館	国立大学法人	杉山　勝	〒466-8555	名古屋市昭和区御器所町	(052)735-5098	(052)735-5102
名古屋産業大学・ 名古屋経営短期大学 図書館	学校法人 菊武学園	河合　武	〒488-8711	尾張旭市新居町 3255-5	(0561)55-3081	(0561)55-5985
名古屋商科大学 中央情報センター	学校法人 栗本学園	浅野　一明	〒470-0193	日進市米野木町三ヶ峯 4-4	(0561)73-2111 (代表)	(0561)74-0341
名古屋女子大学 学術情報センター	学校法人 越原学園	越原　洋二郎	〒467-8610	名古屋市瑞穂区汐路町 3-40	(052)852-9768	(052)852-1830
名古屋市立大学 総合情報センター	公立大学法人 名古屋市立大学	鋤柄　増根	〒467-8501	名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑 1	(052)872-5795	(052)872-5781
名古屋造形大学図書館	学校法人 同朋学園	大橋　基博	〒485-8563	小牧市大字大草字年上坂 6004	(0568)79-1255	(0568)47-0361
名古屋文理大学 図書情報センター	学校法人 滝川学園	森　博	〒492-8520	稲沢市稲沢町前田 365	(0587)23-2400 (代表)	(0587)21-2844
名古屋柳城短期大学 図書館	学校法人 柳城学院	尾上　明子	〒466-0034	名古屋市昭和区明月町 2-54	(052)841-2635	(052)841-2697
南山大学図書館	学校法人 南山学園	細谷　博	〒466-8673	名古屋市昭和区山里町 18	(052)832-3163	(052)833-6986
日本赤十字豊田看護 大学図書館	学校法人 日本赤十字学園	石黒　士雄	〒471-8565	豊田市白山町七曲 12-33	(0565)36-5119	(0565)37-7897
日本福祉大学付属 図書館	学校法人 日本福祉大学	三輪　憲次	〒470-3295	知多郡美浜町大字奥田字会下前 35-6	(0569)87-2325	(0569)87-2795

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX
人間環境大学附属図書館	学校法人岡崎学園	神谷　昇司	〒444-3505	岡崎市本宿町字上三本松 6-2	(0564)48-7815	(0564)48-7815
藤田学園医学・保健衛生学図書館	学校法人藤田学園	宮地　栄一	〒470-1192	豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98	(0562)93-2420	(0562)93-2649
名城大学附属図書館	学校法人名城大学	高橋　友一	〒468-8502	名古屋市天白区塩釜口 1-501	(052)832-1151（代表）	(052)833-6046

□■　三重県　■□　(10)

皇學館大学附属図書館	学校法人皇學館	高倉　一紀	〒516-8555	伊勢市神田久志本町 1704	(0596)22-6322	(0596)22-6329
鈴鹿医療科学大学附属図書館	学校法人鈴鹿医療科学大学	林　顕效	〒510-0293	鈴鹿市岸岡町 1001-1	(059)383-8991	(059)383-9915
鈴鹿国際大学附属図書館	学校法人享栄学園	氷見　潔	〒510-0298	鈴鹿市郡山町 663-222	(059)372-3950	(059)372-2827
鈴鹿短期大学図書館	学校法人享栄学園	川又　俊則	〒513-8520	鈴鹿市庄野町 1250	(059)378-1020	(059)379-4693
三重大学附属図書館	国立大学法人	松岡　守	〒514-8507	津市栗真町屋町 1577	(059)231-9083	(059)231-9086
三重県立看護大学附属図書館	公立大学法人三重県立看護大学	斎藤　真	〒514-0116	津市夢が丘 1-1-1	(059)233-5608	(059)233-5668
津市立三重短期大学附属図書館	(津市)	雨宮　照雄	〒514-0112	津市一身田中野 157	(059)232-2341	(059)232-9647
三重中京大学図書館	梅村学園	相原　正	〒515-8511	松阪市久保町 1846	(0598)29-1122	(0598)29-4986
四日市大学情報センター	暁学園	岩崎　恭典	〒512-8512	四日市市萱生町 1200	(059)365-6712	(059)365-6619
四日市看護医療大学図書館	暁学園	山崎　正人	〒512-8045	四日市市萱生町 1200	(059)340-0705	(059)361-1401

役員館一覧

東海地区大学図書館協議会役員館一覧（平成 10 年度～平成 23 年度）

年度	総　会 当番館	研修会 会場館	会長館	運営委員会	機関誌編集 委員会	監事会	研修企画 小委員会	ホームページ 小委員会
				会長 国立３，公立３，私立４ （短大１を含む） オブザーバ：総会当番館	会長 編集委員は会長の指名	総会で選出， 監事館の図書館長が監事となる	会長館 国立，公立， 私立の運営委員館から各１館 研修会会場館	会長館 国立，公立， 私立の運営委員館から各１館
平成 10 年度	日本福祉 大学	名古屋 大学 岐阜経済 大学	名古屋 大学	愛知教育大学 岐阜大学 浜松医科大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 名古屋市立看護短期大学部 ／三重短期大学 愛知工業大学 岐阜女子大学 金城学院大学 名古屋短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名城大学		
平成 11 年度	愛知県立 看護大学	名古屋 大学 岐阜女子 大学						
平成 12 年度	愛知工業 大学	愛知教育 大学 名古屋 大学	名古屋 大学	三重大学 名古屋工業大学 静岡大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 三重短期大学 椙山女学園大学 大同工業大学 岐阜聖徳学園大学 名古屋短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名城大学	名古屋大学 三重大学 名古屋市立大学 椙山女学園大学 研修会会場館	
平成 13 年度	三重大学	大同工業 大学 名古屋 大学						
平成 14 年度	金城学院 大学	名古屋 大学 名古屋市 立大学	名古屋 大学	愛知教育大学 岐阜大学 豊橋技術科学大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 岐阜市立女子短期大学 椙山女学園大学 金城学院大学 皇學館大学 愛知女子短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名城大学	名古屋大学 岐阜大学 愛知県立看護 大学 金城学院大学 研修会会場館	
平成 15 年度	岐阜県立 看護大学	名古屋 大学 椙山女学 園大学						
平成 16 年度	南山大学	名古屋 大学 岐阜大学	名古屋 大学	浜松医科大学 三重大学 名古屋工業大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学／静岡県立大学短期大学部（H17） 南山大学 中京大学 東海女子大学 名古屋経済大学短期大学部	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 金城学院大学	名古屋大学 名古屋工業大学 名古屋市立大学 中京大学 研修会会場館	
平成 17 年度	名古屋 工業大学	中京大学 名古屋 大学						
平成 18 年度	名城大学	岐阜県立 看護大学 名古屋 大学	名古屋 大学	静岡大学 豊橋技術科学大学 愛知教育大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 静岡県立大学短期大学部（H18） ／三重短期大学（H19） 名城大学 中部大学 中京女子大学 名古屋柳城短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 南山大学	名古屋大 静岡大学 名古屋市立大学 中部大学 研修会会場館	名古屋大学 豊橋技術科学 大学 名古屋市立大学 中京女子大学
平成 19 年度	愛知県立 芸術大学	名古屋 大学 中部大学						
平成 20 年度	愛知淑徳 大学	浜松医科 大学 名古屋 大学	名古屋 大学	岐阜大学 浜松医科大学 三重大学 愛知県立看護大学（H20）／愛知県立大学（H21） 名古屋市立大学 津市立三重短期大学 愛知淑徳大学 同朋学園大学 豊田工業大学 鈴鹿短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名城大学	名古屋大学 浜松医科大学 名古屋市立大学 同朋学園大学	名古屋大学 三重大学 名古屋市立大学 豊田工業大学
平成 21 年度	名古屋 大学	同朋学園 大学 名古屋 大学						
平成 22 年度	名古屋外 国語大学 ・名古屋 学芸大学	静岡県立 大学 名古屋 大学	名古屋 大学	名古屋工業大学 静岡大学 豊橋技術科学大学 愛知県立大学 名古屋市立大学 岐阜市立女子短期大学 名古屋外国語大学・名古屋学芸大学 豊橋創造大学 名古屋学院大学 名古屋産業大学・名古屋経営短期大学図書館	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 愛知淑徳大学	名古屋大学 静岡大学 名古屋市立大学 豊橋創造大学 静岡県立大学	名古屋大学 豊橋技術科学 大学 名古屋市立大学 名古屋学院大学
平成 23 年度	名古屋市 立大学	豊橋創造 大学 名古屋 大学						

研修会一覧

東海地区大学図書館協議会研修会一覧（平成元年度～平成21年度）

年度	年月日	会　場	演　題	講　師	所　属
元	元.12.5	名城大学	学術情報サービスの展開と大学図書館	門條　司	化学情報協会
			アダム・スミスの蔵書をめぐって	水田　洋	名城大学
	2.1.31	名古屋大学	大学図書館の未来像	丸山昭二郎	鶴見大学
2	2.11.29	名古屋大学	Collection building について	川原　和子	三重大学
			大学図書館とニュー・メディア	橋爪　宏達	学術情報センター
	3.1.30	大同工業大学	『経済学文献季報』のデータベース化について－ KEIS から KEIS II へ	山内　隆文	名古屋学院大学
			私の日本の古典文献とのつきあい	朝倉　治彦	四日市大学
3	3.11.8	名古屋学院大	ドイツ及び英国の図書館事情	牧村　正史	名古屋大学
			江戸時代の出版	長島　弘明	名古屋大学
	4.1.17	愛知県図書館	目録システムにおけるハイパーテキストの適用可能性	石塚　英弘	図書館情報大学
			新図書館概要説明及び見学	鈴木　康之	愛知県図書館
4	4.10.21	南山大学	慶應義塾大学の新しい試み－マルチメディアの統合－	原田　悟	慶應義塾大学
			図書館の施設計画に関連して	加藤　彰一	名古屋大学
	5.3.19	名古屋大学	カリフォルニア大学バークレー校の図書館システム	棚橋　章	名古屋大学
			電子情報サービスの新しい展開	寺村　謙一	丸善㈱
5	6.1.26	施設見学会：けいはんなインフォザール			
	6.3.23	愛知医科大学	シーボルトと中京の学者たち	武内　博	東京学芸大学
			大学図書館におけるコレクション形成・管理の意義と問題点	三浦　逸雄	東京大学
6	6.12.6	愛知学院大学	アメリカ図書館最新事情	渡辺　和代 川瀬　正幸	名古屋アメリカンセンター 名古屋大学
			地域・館種を越えた図書館サービス－すべての図書館をすべての利用者に－	雨森　弘行	三重県立図書館
	7.2.22	施設見学会：三重県図書館			
7	7.10.27	名古屋大学	鯨と捕鯨の文化史	森田　勝昭	甲南女子短期大学部
			研究図書館としての電子図書館の事例－機能と運営－	渡辺　博	奈良先端科学技術大学院大学
	7.12.7	愛知工業大学	シンポジウム：利用者教育の在り方－方法と問題点－	光斎　重治 高橋　一郎 四谷あさみ 堀　茂 金子　豊	中部大学 愛知県立大学 愛知淑徳大学 名古屋大学 名古屋大学
8	8.10.24	名古屋大学	インターネット，イントラネットを前提とした図書館情報サービスの将来	後藤　邦夫	南山大学
			電子図書館の諸相：US Berkeley Digital Library Project と Ariadne97	谷口　敏夫	光華女子大学
	8.12.4	愛知淑徳大学	シンポジウム：NDC 新版９版について	石山　洋 万波　涼子 中井えり子 酒井　信	東海大学 名古屋市立大学 名古屋大学 名城大学

年度	年月日	会　場	演　題	講　師	所　属
9	9.10.30	名古屋大学	英国大学図書館における電子情報サービスの進展	尾城　孝一	東京工業大学
			フランス国立図書館 BNF	篠田知和基	名古屋大学
	9.12.10	朝日大学	講演 歌うコンピュータ・描くコンピューターマルチメディア時代への布石－	板谷　雄二	朝日大学
			フォーラム：マルチメディアと電子図書館－図書館機能におけるホームページ－	津田　明美 林　哲也 鈴木　康生 三浦　基	愛知工業大学 浜松医科大学 名古屋大学 南山大学
10	10.12. 5	名古屋大学	テーマ：電子ジャーナルの”いま”と”こんご” 講演 デジタルメディアの現状と今後	逸村　裕	愛知淑徳大学
			電子ジャーナルの事例報告 EES, Science Direct FirstSearch, FirstSearch ECO Journals@ovid, HighWire Press	エルゼビア 紀伊國屋書店 ユサコ	
	10.12.16	岐阜経済大学	テーマ：大学図書館における電子情報サービスの実際 ネット時代の教育・研究環境と図書館の活用	松島　桂樹	岐阜経済大学
			電子情報サービスの事例報告	安田多香子 野村　千里 夏目弥生子	愛知県立大学 南山大学 名古屋大学
11	11.11. 2	名古屋大学	テーマ：著作権法と大学図書館 大学図書館にかかわる著作権問題	石倉　賢一	千葉大学
			電子図書館サービスと著作権	山本　順一	図書館情報大学
	11.12. 7	岐阜女子大学	テーマ：大学図書館と学生用図書 大学教育改革と学生用図書	柴田　正美	三重大学
			事例報告	江口　愛子 吉根佐和子 福井　司郎	浜松医科大学 名古屋市立大学 中京大学
12	13. 1.18	愛知教育大学	テーマ：大学図書館における相互協力 大学図書館における相互協力	石井　啓豊	図書館情報大学
			事例報告	平井　芳美 濱口　幾子 加藤　直美	名古屋大学 愛知県立看護大学 愛知工業大学
	13. 3. 9	名古屋大学	テーマ：大学図書館の管理・運営 大学図書館の管理・運営	長谷川豊祐	鶴見大学
			コンソーシアムを視野においた大学図書館の運営	松下　鈞	国立音楽大学
13	13.12.20	大同工業大学	テーマ：古文書の整理と保存： 電子メディア変換（画像）による利用について 講演 古文書の整理と保存	秋山　晶則	名古屋大学
			事例報告 徳島大学附属図書館貴重資料高精細デジタルアーカイブ－２１世紀地域ネットワークへの試み－	岡田　惠子	徳島大学
	14. 1.24	名古屋大学	テーマ：図書館の電子化と所蔵資料を核とした地域との連携 ディジタル時代の図書館	逸村　裕	名古屋大学
			所蔵資料の高度活用を目指して－地域の博物館・図書館等の連携－	種田　祐司	名古屋市博物館
14	14.12.13	名古屋大学	テーマ：学術情報の電子化を考える 講演 学術情報の電子化が意味するもの－研究者の立場から考える－	倉田　敬子	慶應義塾大学
			事例報告 名古屋大学における電子ジャーナルの現状について	澄川千賀子・ 川添　真澄	名古屋大学

年度	年月日	会　場	演　題	講　師	所　属
14	15. 3. 4	名古屋市立大学	テーマ：現代の大学図書館と著作権 講演 現代の大学図書館と著作権	土屋　俊	千葉大学
15	15.12.15	名古屋大学	テーマ：図書館のサービス・マネジメントと評価 講演 図書館のサービス・マネジメント：顧客の選好と評価	永田　治樹	筑波大学
	16. 2.19	椙山女学園大学	テーマ：SPARC の現状と SPARC/JAPAN の今後について 講演 SPARC の現状と SPARC/JAPAN の今後について	安達　淳	国立情報学研究所
16	16.12.17	名古屋大学	テーマ：電子的学術情報利用の進展と今後の展望 事例報告 名古屋大学の電子図書館化計画－機関リポジトリ構築計画を中心にして－ 医学系図書館の電子ジャーナル状況と日本医学図書館協会電子ジャーナルコンソーシアムの現状 電子ジャーナルの利点と課題－サイエンス・ダイレクトを例に－	郡司　久 坪内　政義 高橋　昭治	名古屋大学 愛知医科大学 エルゼビアジャパン
	17. 3. 3	ぱるるプラザ GIFU	テーマ：大学図書館におけるアウトソーシング 事例報告 日本福祉大学付属図書館におけるアウトソーシング アウトソーシングを活用した大学図書館運営－立命館大学における現状と課題－ アウトソーサーからみたアウトソーシング	岡崎　佳子 田中　康雄 図書館流通センター	日本福祉大学 立命館大学
17	17.12. 2	中京大学	テーマ：図書館情報リテラシー指導の現状－各大学の事例報告－ 基調講演 大学図書館と情報リテラシー	逸村　裕	名古屋大学
			事例報告 名古屋大学附属図書館における情報リテラシー教育 図書館情報リテラシー教育－小さな図書館，小さな学部での試み－ 中京大学図書館　情報リテラシー教育の現状 ニッチ戦略（隙間産業）で，大学に貢献できる情報リテラシー教育支援を目指す－三重大学附属図書館の取組－ 岐阜県立看護大学図書館における利用教育 大学ポータルを中心とした名古屋学院大学の情報環境	次良丸　章 原　泰子 春日井　正人 杉田　いづみ 井上　貴之 中田　晴美	名古屋大学 名古屋市立大学 中京大学 三重大学 岐阜県立看護大学 名古屋学院大学
	18. 1.30	名古屋大学	テーマ：利用者サイドに立つ図書館サービス 講演 北米大学図書館における利用者中心の図書館サービス	シャロン・ドマイヤー	マサチューセッツ大学
			利用者の利用行動に基づいた図書館サービス	越塚　美加	学習院女子大学
18	19. 1.12	岐阜県図書館	テーマ：大学図書館の地域連携 事例報告 相互利用協定と愛知県内図書館の ILL 定期便設置実証実験 静岡県内の大学図書館における連携について 岐阜県における公共図書館との連携図書館 東海目録（TOMcat）：病院図書室と大学図書館の連携 図書館の教育支援，地域支援：豊田高専の英語多読を通して	村上　昇平 大石　博昭 木村　晴茂 坪内　政義 西澤　一	愛知県図書館 静岡大学 岐阜大学 愛知医科大学 豊田工業高等専門学校
	19. 3. 7	名古屋大学	テーマ：Web2.0 時代の図書館サービス 基調講演 Web2.0 時代の図書館	岡本　真	Academic Resource Guide
			講演 図書館利用者の情報探索活動に関する実証的研究 Web2.0 時代の新たな図書館サービスの展開	寺井　仁 林　賢紀	名古屋大学 農林水産省
19	19.11.28	名古屋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 大学図書館職員に求められているもの 資料の収集～目録・分類 電子情報（電子ジャーナル，データベース等）	雨森　弘行 河谷　宗徳 粟野　容子	お茶の水女子大学 三重大学 名古屋大学

年度	年月日	会　場	演　題	講　師	所　属
19	19.11.28	名古屋大学	図書館情報リテラシー教育 ILL 大学図書館の最近の動向・海外事情	紅露　剛 万波　涼子 松林　正己	南山大学 名古屋市立大学 中部大学
	20. 3. 5	中部大学	テーマ：魅力ある大学図書館をめざして 講演 どこから拓く？　大学図書館の可能性－学習支援の視点から ここから拓いた－お茶大図書館活性化のための５つの作戦	井上　真琴 茂出木　理子	同志社大学 お茶の水女子大学
20	20.12.22	アクトシティ浜松	テーマ：図書館と著作権 講演 図書館業務と著作権 映像資料の利用と著作権法について	南川　貴宣 三浦　正広	文化庁著作権課 国士舘大学
	21. 3. 4	西尾市岩瀬文庫	テーマ：学芸員の世界 岩瀬文庫見学 講演 学芸員の仕事　－内藤記念くすり博物館の世界－ 学芸員の仕事　－岩瀬文庫の世界－	野尻　佳与子 林　知左子	内藤記念くすり博物館 西尾市岩瀬文庫
21	21.12. 3	同朋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 大学図書館職員に求められているもの 資料の収集～目録・分類 電子情報（電子ジャーナル，データベース等） 情報リテラシー教育 ILL 大学図書館と広報	雨森　弘行 河谷　宗徳 粟野　容子 久田 睦美 榊原 佐知子 渡邊 敏之	前お茶の水女子大学 三重大学 名古屋大学 名古屋市立大学 愛知医科大学 名古屋造形大学
	22. 2.23 22. 3. 5 22. 3.10	名古屋大学	保存修復講演会・講習会 テーマ：図書資料の保存と修復 講演 紙資料の保存修復 講習会 修復実務講習会	金山　正子 岩田　起代子	元興寺文化財研究所 前 名古屋産業大学・名古屋経営短期大学図書館

「東海地区大学図書館協議会誌」掲載記事の電子的公開，転載，学術機関リポジトリでの公開について

・著作権は著作者本人にあります。

・著作者本人が，ホームページ等で電子的公開，転載，あるいは学術機関リポジトリへ搭載する場合，著作者本人からの申請書等の提出は必要ありません。

（平成 19 年 7 月 9 日　東海地区大学図書館協議会運営委員会（第 19－1 回）決定）

東海地区大学図書館協議会誌　第 55 号（2010）

平成22年12月20日印刷　　平成22年12月25日発行

編集・発行　東海地区大学図書館協議会事務局

名古屋市千種区不老町　名古屋大学附属図書館内

電話　052－789－3666

ホームページ　http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tokai/

振　込　先　三菱東京ＵＦＪ銀行今池支店　普通預金　口座 1747229